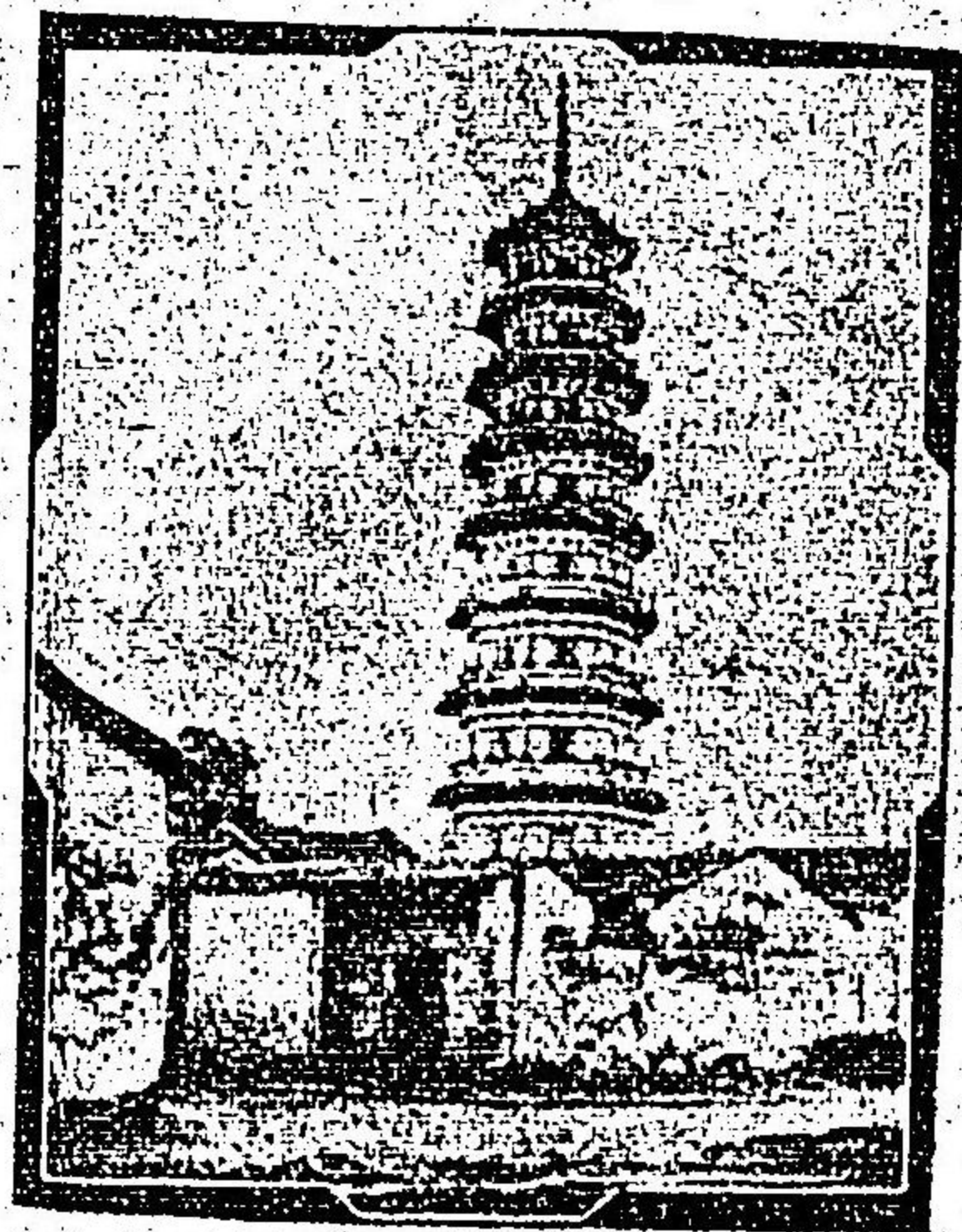


一覽
東洋歷史表解
全

253
363

全部廿二冊
普通歷史叢書
東京大學



003405-000-5

特61-821

東洋歷史表解

久保田 操 / 編

M40

ACC-1930



8

特 61
821

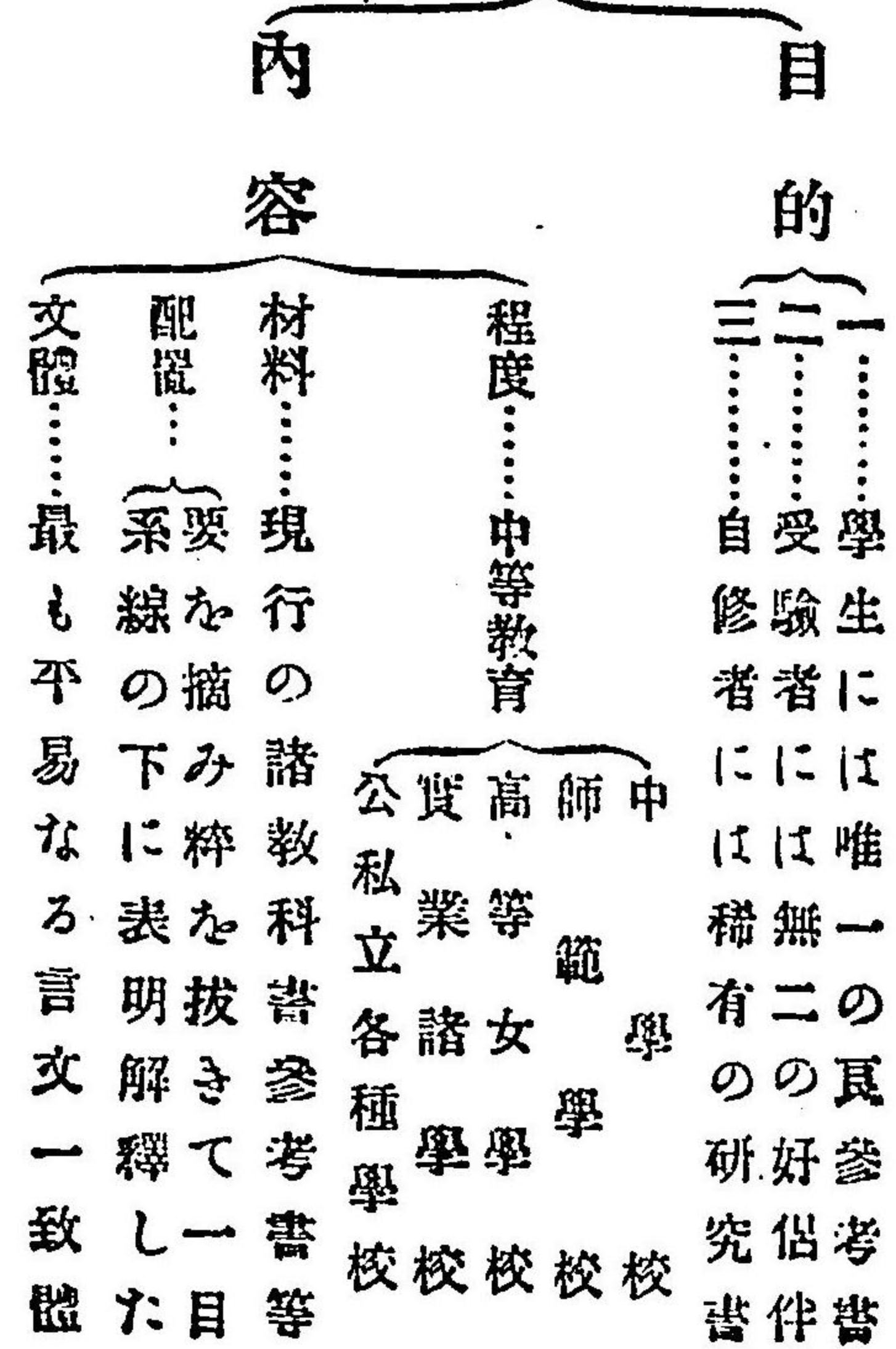
久保田操著作

言文
致東
津
歴史表解

大阪
田中栄堂發行

内容

例言

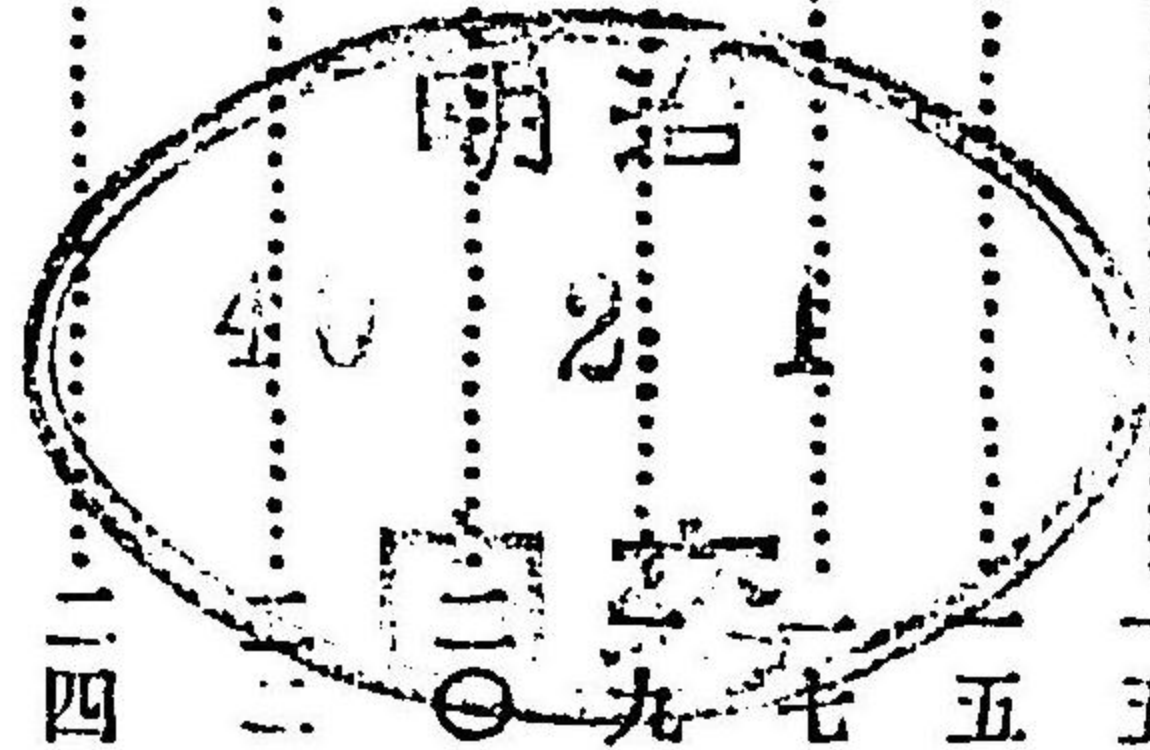


一言致文 東洋歴史表解

目次

(1) 次 目

發端	一	春秋の世	一三
上古史	二	吳越の覇業	一五
支那建國創始	二	戰國	一五
唐虞	三	周末の學術	一七
夏殷	五	太古の印度	一九
周	七	佛教の興起	二〇
朝鮮	八	中古史	二二
		前漢	二四
		後漢	三一
		三國時代	三三
		西晉	三八
		東晉	四〇



次

南北朝時代	四一
隋	四五
唐	四六
五代の世及び契丹	六〇
宋	六二
近古史	七六
蒙古(元)	七六
明	八七
近世史	一〇五
清	一〇五
朝鮮	一三一

東洋諸國

東洋諸國	一三六
------	-----

附表

東洋史略年表	一三九
主要なる系圖	一六一
歷朝年代畧表	一六八

目次了

東洋歴史

一言文 東洋歴史表解

發端

東洋の範圍は西洋に對して、東洋といふ名稱がある。さうすると。必ず、あじあ(Asia)全洲、ねーすところしあ(Australia)をも含まなければならぬわけとなつて来る。けれども、今、研究せんとする東洋は、あじあ洲の東南部に國する、次の數ヶ國を限るのである。

久保田操編

- 東洋諸國
- 支那帝國 (清)
 - 朝鮮 (韓)
 - いと支那 (Indo-China)
 - シヤム (Siam)

(記憶筆記)

上古史

支那帝國の創始

支那は、あじあ洲の東部にある大國であつて、今からざつと、五千年の昔に建てられたものであつて、住民は、所謂、漢族（支那種族）であるが、これは固有の支那人種ではなうて、以前に、中央あじあから移住して、黄河の上流地方を経て、支那本部に入り、當時、楊子江や黄河の間に群つてゐた、土人苗族を征伐して、これに代つたものであること。建國の有様について、いろいろの説があるが、この國でも、太古の事蹟は、信するに足らないことばかりで、殆ど、詳かにし難いのである。但し、上古の君長に、三皇五帝があつて、諸種の發明をなし、大に、治蹟が上つたことである。

三皇ごその事蹟

燧人氏：摩擦によりて、火を出し、火食することを教へた。
庖犧氏：八卦及び漁法を教へ、又、婚姻の道を教へた。
神農氏：農業を教へ、又、交易の道を開いて、商業の摸型を作つた。殊に草根木皮を味へて、醫藥を創めたのである。

黃帝：舟車を作り、文字を制し、養蠶を教へ、音樂を定めた。その他、貨幣、曆法、數學、開墾、造營等を始めた。

五帝ごその事蹟
堯帝：曆象を作り、民に時を授け、禹に洪水を治めしめた。聖徳高く、無爲にして天下能く治まつた。

舜帝：九官五刑の官制を定め、その他、教育、祭祀、貢賦等の官制を定めた。

九官

典虞后納共士秩司
樂 稷言工 宗徒空

五

刑
大宮判劔墨
辭

唐虞の治

堯は聖徳あつてよく政治を勉め、人民は皆満足して、これを謳歌した。孝悌の譽れ高き舜を引上げて天子の位を禪した。舜は堯に次いで帝位に上り、外は苗族を征して版圖を擴め、文徳武功、共に稱すべき治蹟であつた。後世、堯舜二帝の時代を唐虞の治と唱へた。

(記憶筆記)

夏殷二代

夏の禹王

由來

來

堯舜のとき前後八年間大洪水を治めて功があつて、遂に、舜の禪を受けて位に上り、國を夏と稱へた。

治蹟 九洲を開き九道を通じ、九山を度り、九澤を披し、九洲の貢賦を定め、四夷賓服した。

禹王崩じて、その子啓が次いで天子となった。これまでは、その位を臣に讓つたが、禹に到つて、その子に王位を嗣がしめた。世襲相傳の風がこの時から始まつたのである。啓の子、相の時代になつて、有窮といふ國の羿ゲイといふものゝために、一時、位を奪はれたが、相の子、少康に到つて、一成一旅より身を起し、遂に、賊臣を誅して國を復した。

夏の滅亡 桀王は、夏の最後の王であつて、淫虐暴戾、賢良の士を退け、天下の民望を失ふた。殷の湯王のために、鳴條の一戦に亡されてしまった。

(記憶筆記)

殷の湯王

由來…舜の名臣契セウの後裔である。治…賢相伊尹の輔佐を得て、天下が大に治まった。

紂王の失政

暴虐を極め、嚴刑を課し、租税を重くし、忠臣の諫めを退けて、酒池肉林を作つて、長夜の飲をなした。そこで大に政を失つた。

殷の滅亡…周の武王、紂王の失政に乗じて、兵を擧げ牧野に會戦し、大に紂を破つた。紂、自殺して、殷は遂に亡んだ。

殷の三仁

微子…微子は、紂王を諫めて聞かれなかつたため、周に奔つた。
箕子…奴となつて隠れた。
比干…諫めて殺されてこまつた。

夏の存立約四百年……………殷の湯王に滅さる。

周

殷の存立約六百年……………周の武王に亡さる。

周の二王

文王 周の始祖は、堯舜禹に仕へて、農事を司つた、姫婁といふ人である。子孫その業を嗣ぎ、古公亶父に至つて、始て國を周と名けた。その孫の昌が文王である。
武王 文王の子、殷の紂を亡して、大に、宗族功臣を封じて、政治上の改革をなした。

文王武王、ともに、聖徳があつて、威望次第に加つた。太公望を用ゐて、大に治績が上つた。

國

王 殷の箕子、朝鮮に奔つて王となる、子孫相つぎ九百餘年に及んだ。

古朝鮮

地理

朝鮮は、東亞の半島であつて、その南は、我國の對馬と、僅かに、十里を隔つるばかりである。昔から、我國とは、密接の關係がある。元來、朝鮮は東(日本)、北(滿洲)、西(支那)の三強隣のため、交渉事件の多き國である。

(記憶筆記)

東洋歴史

周の盛衰

周の武王の子成王、まだ、幼年であつたから、叔父の周公がこれを輔けた。周公は賢明にして、大に、力を政治につくした。支那末代に至るまで、皆、周公の典章に法つた。周末に幽王といふ王があつて、淫虐にして政を怠り、遂に夷狄のために攻め殺された。幽王の子、平王に至つて周室いよいよ衰へ、遂に西都(鎬京)を去り、東都(洛邑)に遷つた。周の東遷はこのことである。

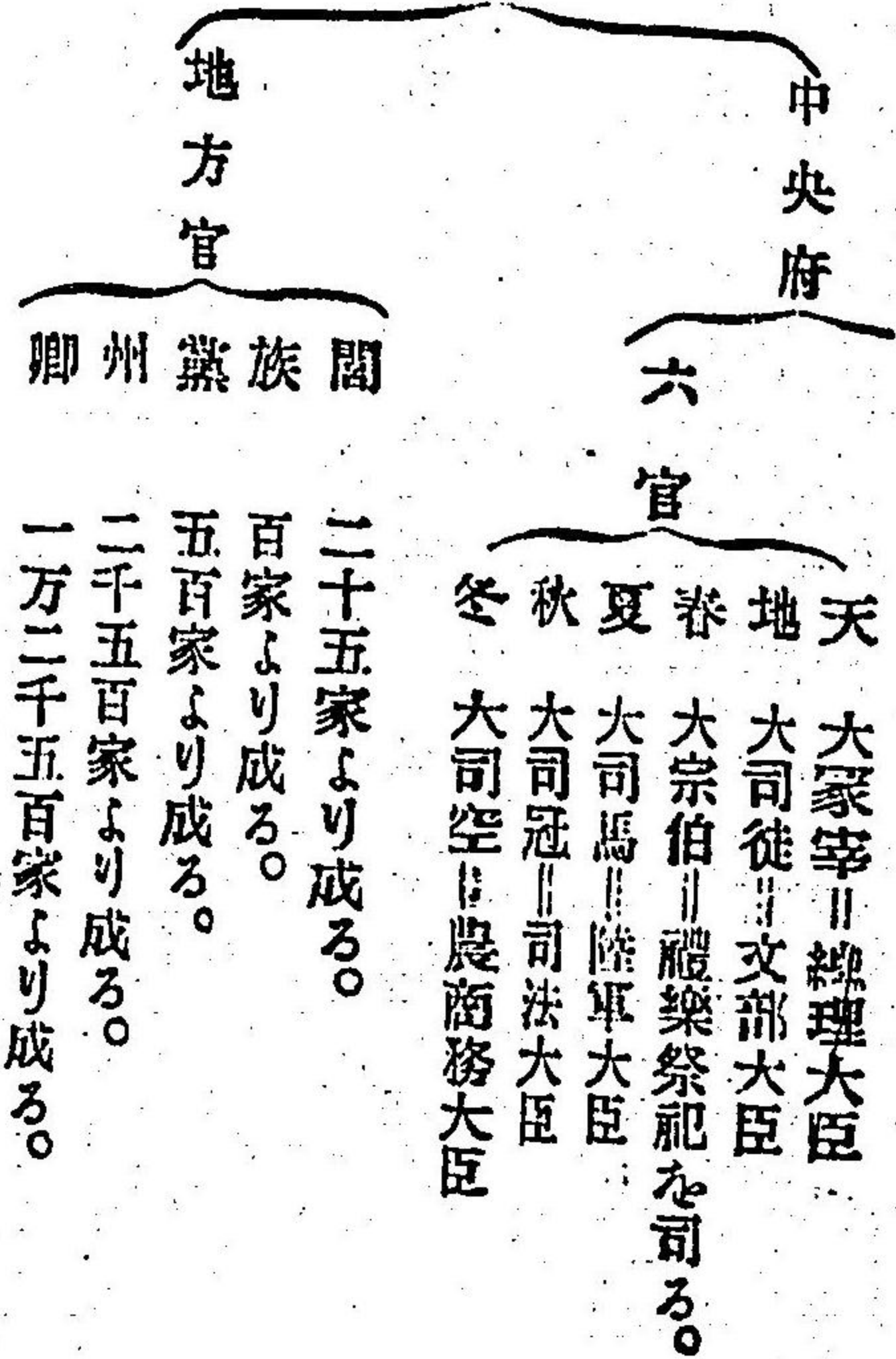
8)

六顧問

三公 || 太師、太傅、太保。大保。三孤 || 少師、少傅、少保。樞密顧問官

東洋歴史

周の官制



封建の制度は、唐虞時代から起つたものらしい。周になつて、その制度を定め左の五爵を於いて、その領地を治めさせた。

公 領地百里。

(9)

(記憶筆記)

五

爵

伯…領地七十里。
男子領地五十里。

周の田制

私田	私田	私田
私田	公田	私田
私田	私田	私田

(井田の法)

九百畝を一井とし内百畝を公田とし其餘は百家各百畝を給し、八夫をして公田八十畝を耕さしめ、每家其收入十分の一を納めしむ。

(01)

(記憶筆記)

周の兵制

軍人

隊

天子は地方千里、兵車萬乘を出す。
諸侯は戦時に兵車千乘を出す。
太夫は兵車百乘を出す。

員

一乗には、甲士十三人、歩卒七十二人、併せて七十五人。五百人を旅といふ。二千五百人を師といふ。一万二千五百人を軍といふ。天子の親征は六軍を指揮し、諸侯は三軍を率ゐる。

(01)

(記憶筆記)

周の教育

學校

校

大學に己を修め、人を治むるの道を教へる。
小學に洒掃應對、進退の節を教へる。

法

天子は、日月星辰を祭るの大禮がある。
父母の喪は三年…喪期には喪服を着く。
父祖の祭には、形代を設けて死者に事へる。
子は父母に絶対的、服従すべきものである。

六藝に禮、樂、射、御、書、數。

【註】

形代カタシロとは、昔、神を祀るとき、その神靈の代として、作りたるもの。佛家の位牌の類。

(11)

(記憶筆記)

祭

祀 三大祀……天地。山川。祖先。
三 禮……天神。地祇。人鬼。

(記憶筆記)

周の風俗

貴賤の別……貴賤尊卑の懸隔は非常なものであった。

四民の職業……士、農、工、商は、皆、その業を世襲した。

男女の別

E	D	C	R	A
七歳になるまで、男女の交際を禁じた。				
男子は、八歳になって、學に就く。				
女子は、十五歳になって、笄を加へる。				
男子は、二十歳になって、冠を加へる。				
男子は、三十歳、女子は二十歳を以て、婚期とする。				

周の末路 (周の東遷)

西 周

成王から康王に至る四十年間、周室全盛の時期であつて、世に、成康の治と稱せられる。

東 周

幽王、褒姒といふ婦人を近づけ、國政が大に亂れた。平王のとき、犬戎に攻められて、洛邑に遷つた。

春秋の世

周の平王より以後敬王に到るまでの間を春秋の世といふ。これは、孔子がこの時の歴史を記載した書物の名から取つたものである。

春秋の由來

周室東遷の後は、その力振はず、諸種族争ひ起りて、制するに及ばなかつた。この時、上に天子を戴き、尊王攘夷を稱へて、諸侯の盟主となつたもの、これを覇者といふ。

齊の桓公

桓公は始めて覇者となつた人であつて。管仲といふ名臣の謀を用ひ、農業殖産の道をほつた。諸侯を糾合して山戎、北狄を討つた。

(記憶筆記)

春秋の五覇

諸侯を會して、列國の平和を計った。
桓公管仲の二人相前後して死し、五公子、立たんことを争って、國が衰亡した。

宋の襄公

齊の桓公に次いで覇者となったが、國が小さくて賢相がなかったため治國の基が開かれなかった。

晋の文公

文公は、中國の諸侯を統べて覇業を成した。
周の襄王を保護して尊王の實を示した。

秦の穆公

初めて、渭水の上流に國し、周室東遷のとき、岐豊といふ處を得て漸く強大となった。
穆公は、百里奚等の輔佐により、國を併せ、地を拓き、晋の文公と相對して、西方の雄鎮であった。

楚の莊王

莊王は、秦晋の争に乗じて、南方に覇者となった。
莊王の死後、國威衰へ、吳越の二國、南方より起って覇者となった。

(記憶筆記)

吳越の覇業

吳王闔閭は、楚の亡臣伍子胥を用ゐて、大に楚を破ったが、後、越王の勾踐と戦って敗死した。勾踐の子、夫差、父の仇を復せんことを思つて、朝夕、勞に臥し、遂に、越軍を破り、勾踐を會稽に圍んで、これを降し。遂に、中國に入つて覇者となった。

越王勾踐は、膽を坐臥に懸け、仰ぎて、これを嘗め、謀臣范蠡と謀りて回復に つとめ。吳を亡し、一時、強大を極めたが、勾踐死して、楚に亡ぼされた。

戰國

春秋の間五覇は、はるくいで、小國はいよく併吞せられ、大國は、ますます強大なつて、互に、攻争をなし、嚴然として獨立國の體面を保つものが出来た。所謂、戰國の七雄である。

戰國七雄：楚。秦。燕。齊。趙。韓。魏。

(記憶筆記)

戦國の形勢

戦國時代

周の平王から、約三百年を経て、威烈王に至る。これから後、二百年間を戦國の世といふのである。

(記憶筆記)

諸侯の有様

文武周公の道徳地を掃ひ、周室の勢力は、日に月に微弱となり、諸侯は弱肉強食の有様となった。

秦の強盛

七雄の内、獨り、秦のみは、山西に據りて、他の六雄と分離して、六雄互に争うてゐる間に、民力を養って、國政を整理した。

秦の戰國諸侯に對する位置——秦の孝公のときには、已に、富國強兵となつて、ぼつくと、他の六國を攻め始めた。六國は、今は、防禦の地に立つて、秦と對抗せねばならぬやうになつた。この時、蘇秦といふ雄辯の士が出て、六國の合従説を唱道した。

合従策

蘇秦は、得意の雄辯を振ふて、燕、趙、韓、魏、齊、楚の王侯に説きて、六國相合して、秦に當らば、六國の生存は危むといふて、遂に、自ら六國の相となつた。

連衡策

秦から張儀といふ策士が出て、右の合従を破つた。張儀は秦のために、六國に説き、相並びて、秦に仕へ六國の中、一國これに違へば、五國これを撃つといふ、これを連衡策といふ。

秦の一統

其後百年ほどの間は、六國のうちで、或は秦に服するものやら、或は、反するものやら、少しも定まりがなかつた。その間に、秦は、いよいよ強大なつた。秦王政の頃には、李斯といふ謀臣を用ゐて、遂に、六國を亡し、天下を統一した。

周末學術

(記憶筆記)

周末學問の勃興

原因：周室衰へ言論が自由になった。
結果：學者、論客、盛に起った。

春秋の世は、社會の變亂といふに、人材を求むることも急なれば、恰も英雄が
出で、兵力を闘はしたやうに、いろいろの學者が出で、各其學說を争ふた。
百花咲き亂れたるの盛觀を現はしたのは、このときである。

孔

子

出 所

身 說
孔子名は丘といひ字を仲尼といふ。春秋の末、魯の國に生れた。聖人であつて、儒學の祖である。

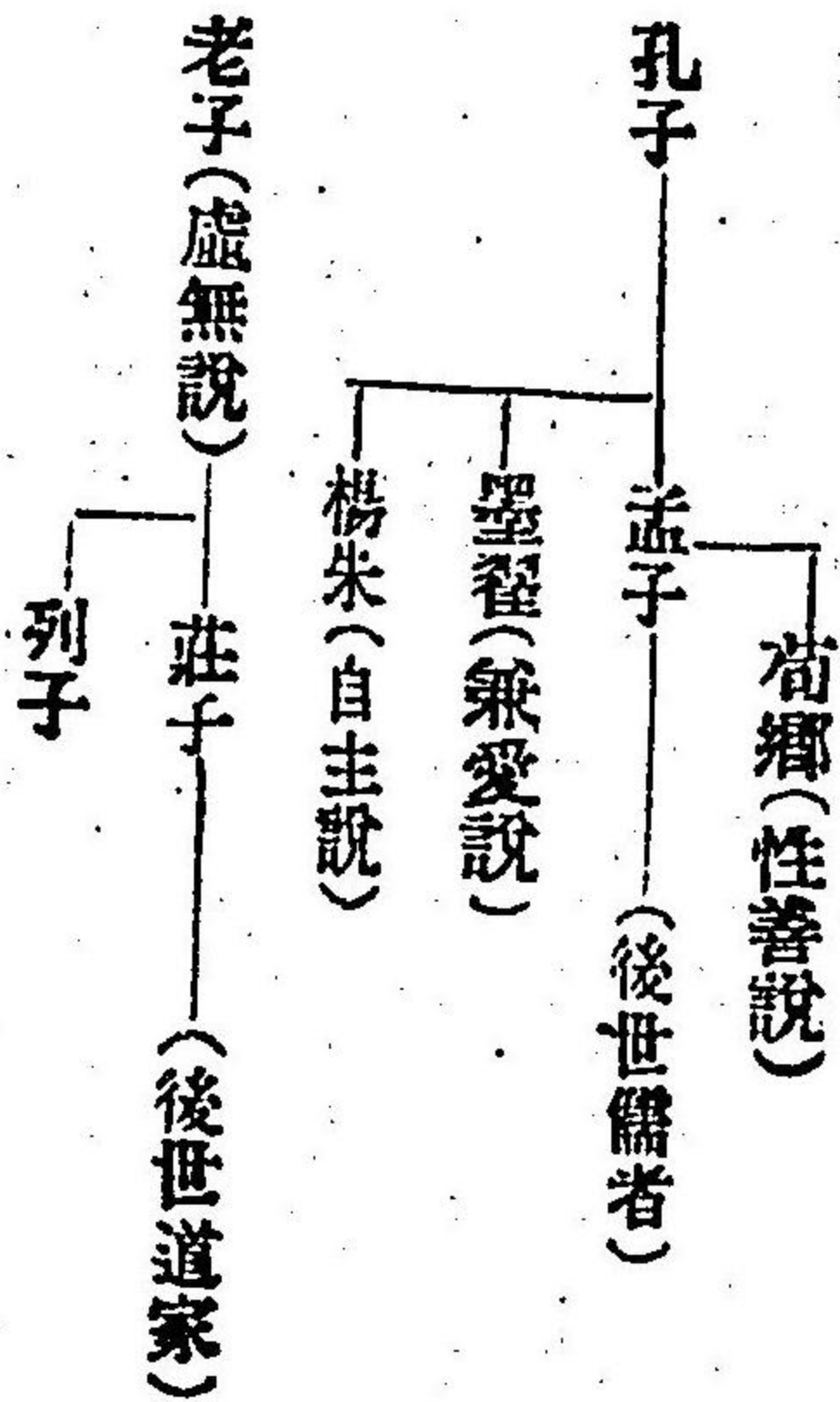
人間の行爲は、仁を以て本とし、修身齊家より推して、治國平天下に及ぶ。後世、支那全體の思想界を支配し、他の東洋諸國にもその説が影響した。

孔子の末流は學說の異同の後、孟子出で、性善説を唱へ、荀子出で、性惡説を唱へた。皆、孔子の教を潤色したものである。

(記憶筆記)

老子は、自然虚無を説き、そのいふ所、高尚にして深遠である。後世、道教といふものは、この教である。

周代に於ける學者の系統



太古の印度

印度は世界の最盛國であつて、四千年ほど前に、ありあん(Aryan)人種が、亞細亞より下つて来て、他の種族を征服して、ここに建國の基礎を設けた。その時から四姓の別といつて、四の社會的階級に造つた。

(記憶筆記)

印度の四階級

- 一、僧族……最高位にして宗教及び教育を司る。
- 二、王族……政治及び軍事を司る。
- 三、平民……商工等の實業に従事する。
- 四、奴隸……賤業労働に従事する。

印度、當時の僧族は、波羅門教(Brahman)の主教者であつて、ありあへん人種以外の平民を奴隸に使つてゐたのである。印度のこの階級制度は、常に、騷亂を起す原因となつた。

印度には、小國が分立して争ふてゐるから、外人の侵入を受けても防ぐ力がな
い、ペルシア(Persia)の侵入やら、ギリシア(Greece)のあれはとんでる(Alexander
the Great)大王も、印度河畔の地を攻略した。

佛教の興起

出身 中印度迦比羅城(Kapilavastu)主の太子、悉達(Siddhartha)といふ人である。無常を觀じて衆生を濟度せんことを思ひ雪山に入った。

釋迦

教旨 一切衆生は平等である、正道を行ひ解脱する。

結果 印度人は、波羅門教徒の專横、及び、階級制度の嚴なのに、皆、苦んでゐたから、種族の別を立てないで、一切平等を説くところの佛教に、皆、歸依した。さうして釋迦牟尼佛と稱せられた。

【註】釋迦は、種族の名、Sakyaである。牟尼は賢者の義、Muni. 佛すなはち佛陀は、眞理賢者の義、Buddhaである。

新宗教大に歡迎せられ、釋迦の死後、阿育王(Ashoka)其擴張につとめ、佛教を以て國教とした。それゆゑに、印度國內は勿論、中央・亞細亞諸國よりせいろん(Ceylon)まで傳はつて、世界の一大宗教となつた。

世界の三聖 釋迦 孔子 基督

秦

始皇帝

稱號 秦王政は、六國を亡し、天下を統一して、王を改めて皇帝と稱へ、三皇五帝の名を取り、自ら、始皇帝と名けた。

治 丞相李斯の謀を用ゐ、封建を改めて郡縣となし又、官制を改め、天下の兵器を沒收し、富豪を首府に移し、宮殿を壯にして、中央集権の實を擧げ、目ざましい改革をなした。

外征 始皇帝は、國內に新政を施して、帝威を示すに同時に、外に對しても、常に、國威を輝すことに勉めた。將軍蒙恬を遣して、三十万の大兵を以て、匈奴(Hungna)を討たしめた。彼の有名なる萬里の長城を築いて、大に、秦の威名を四方に輝した。

秦の滅亡

爲政者の非常手段 (焚書坑儒)

原因 秦の新政苛酷に過ぎて、人民は、皆、この激變を喜ばず、學者は起つて、皆、これを誹謗した。

結果 始皇丞相李斯と謀つて、この新政を誹謗したものの四百六十人を坑殺した。又、釋樂卜筮農業以外の民間の典籍を焼き盡した。

蜂群雄起の 始皇が巡遊中に死んで、次子の二世皇帝が立つたが、暗愚の君であつて、日夜淫樂に耽り、少も、政治を顧みなかつた。奸臣趙高、權を恣にして、皇族や大臣を殺し、暴政を行ふたから、そこで、六國の遺臣やら、又、始皇のときから苛酷の政治に不平を抱いてゐた人民が、四方に蜂起した。

皇帝弒 二世皇帝は、趙高のために殺され、公子嬰は、ついで降参した。始皇の死後、三年も立たないうちに、秦は滅亡してしまつた。秦、帝を稱すること、僅に、十五年間。

漢楚の争

分阿雄争の

秦末の群雄中、尤も勢力のあったのは、楚の項羽と、漢の劉邦とであった。項羽は兵を江東に起し、劉邦は、兵を沛に起した。劉邦は、多くの良臣を用ゐて、方略を定めた。項羽は勢に乗じて、經畫を誤り、遂に、垓下の戦に敗れて自殺した。

高祖一統の

こゝに於いて、劉邦全國を一統して、帝位に即き、國を漢と稱へ、長安に都した。高祖皇帝は、この人である。

漢の三傑
蕭何 張良 韓信

前漢

(記憶筆記)

漢の高祖

政治

治

高祖が位に即いて、周の封建制と、秦の郡縣制との成敗を鑑みて、利害のあるところを覺り、これを折衷して、封建郡縣兩制を用ゐた。

衰微

微

子弟に廣大なる地を封じて、王室の藩屏となし、却つて、諸王の権力が重きに過ぎて、王室が衰微した。

呂氏の亂—高祖崩じて、惠帝が立った。尙、幼弱であるから、その母の呂氏が政を攝した。呂后は、高祖が微賤のときから、共に、艱難を嘗めて、その大業を成功するについては、呂氏の功が十分にあつたから、その勢力は、非常のものであつた。呂氏の一族、朝廷に蔓つて、呂后の死後は、皆、帝位を争つた。陳平、周勃等、力を盡して、諸呂を討滅した。これを呂氏の亂といふ。

吳楚七國の亂—原

因 皇帝のときに、同族の諸王、次第に朝命を奉ぜないやうになつたから、その封地を削らうとし、こゝに、七國の反亂を招いたのである。

(記憶筆記)

一 結 果

〔吳王、他の王と、ともに、漢に反抗したけれど、漢將周亞夫、これを平定した。〕

(記憶筆記)

孝武皇帝武帝は次いで即位したが、英武の君であつて、孝文孝景の二帝が儉約を行ひ、國を富ました後を受けて、よく、その富を利用し、外は領土を擴め、内は學術文化の進歩を促した。

文教復舊

秦の火坑以來、書籍滅盡して、學問その跡を拂つたといふ有様ではあるが、漢が起つてから後、文教漸く起り、武帝の時に及んで、大に隆盛を極めた。

人才登庸

大學を興し、五經博士(易、詩、書、禮、春秋)を置き、子弟を養成し、學術及び德行あるものを登庸した。

名士輩出

〔蕭仲斜、孔安國、司馬遷、司馬相如等の名家が續々輩出した。〕

武帝の偉業

年 號 の 始

〔武帝即位の年(皇紀五二二)、はじめて、年號を立て、建元と稱へた。これが、東洋に於ける年號の始である。〕

外 征

武帝在位五十餘年の間、南越を平げ、朝鮮を従へ、匈奴を逐うて、連りに、國威を外に輝かした。

匈 奴

漢の北方にある國。その昔、南蠻といふた時から、或は、中國の屬邦となり、或は獨立し、嚮背少しも定まらなかつたが、武帝のために、討たれた。

南 越

秦末に獨立したけれども、武帝は、これを征して、郡縣とした。

朝 鮮

漢の東方にあつて、箕子建國以來、久しく繼續してゐたが、漢の始に衛滿といふものゝために國を奪はれた。武帝は、この衛氏を征伐して、領地となしたのである。

(記憶筆記)

三

韓

馬 韓 京畿道の南部
 忠清 全羅一帯の地
 辰 韓 慶尙道の東北の地
 辨 韓 慶尙道の南部

この時、張濞といふものを、遠く中亞の地に遣はして、匈奴を討つことの便利を計ったが、張濞辛苦艱難した甲斐もなく、その目的を達することが出来なかったが、その代に、印度の形勢を究め、沿道諸國の物産等を持ち歸り、大に、支那の文化上に功績を興へたのである。

財政困難

武帝は、遠攻近交の策を立て、國威は外に張つたけれども、財政、大に、困難に陥り、國費多額にして、貯蓄が、悉く、なくなつた。

武帝の晩年

窮策百出

いろいろの新税を起して、民の利を奪ひ、得を賣り、死罪を贖はしめる等の窮策を講じたけれども、到底、救ひきれなかつた。

その結果

百姓疲弊して、盜賊起り、國內騷然の有様なつた。

武帝崩じて後、昭帝、宣帝、相次いで、帝位に上つたが、武帝の四方征伐の後を承けて、只、民力の休養を力めた。

昭帝宣帝の治蹟

攝政 昭帝の時、霍光、政を攝し、よく、民力を養ふた。
 宣帝の時、魏相、丙吉、黃霸、干定國、政を攝した。
 良吏 趙廣漢、朱邑、龔遂等の良吏、前後相次いで出た。

漢室の衰微

王氏の黨
政權を恣
にする。

宣帝崩じて後、數代を経て成帝のときになって、帝幼なるを以て、母の王氏朝に臨み、政を執つた。それから王氏の黨が續々あらはれ、政權を恣にし、又、官官等の驕奢も甚だしかった。

王莽の亂
漢の中絶

纂立
新政

王莽は皇后王氏の父であつて、恭儉博學、人望を中外に博し、王氏の勢盛なるに及んで、こゝに野心を生じ、遂に、天子を殺して、皇帝の位に即き、國號を、新と改めた。

漢の王族の爵位を奪つて、己の宗族に與へ、みだりに、漢の制度を改めて、租税を重くし、錢貨を改鑄した。この急激の改革のために天下の、民は、皆離畔した。

(記憶筆記)

後漢

漢室の中絶前後によつて、前漢後漢の名がある。又、その國都の位地によつて前漢を西漢と稱し、後漢を東漢と稱する。

光武皇帝

治蹟

漢室再興

光武皇帝は、漢の王族劉秀といふ人である。王莽の亂を平けて、天下を一統し、洛陽に即位し、漢室を再興した。

王莽が虐政の後を承けたから、つぎめて、人望に従ふため、すべて前漢の制度に復舊して、なるべく外國との交通を避け、情節の士を養ふことに、つぎめたから、天下は、皆、太平を謳歌した。

(記憶筆記)

東洋史中の一大事件

佛教傳來

明帝の時、西域と交通して、佛教のあることを知り、使を大月氏に遣はし、高僧、迦葉摩騰 (Kashyapa Moggallāna) を伴ひ、佛像、佛書を携へて來らしめ、洛陽に白馬寺を建てた。皇紀七二七

その影響

それから、佛教は、次第に支那に、流行し、東亞諸國の文化に、一大影響を興へるやうになつた。實に、佛教傳來は、東漢二百年間のみならず、東洋史中の一大事件である。

(三) 國政をみづからして、外威の權を收め、又、大學を起し、教化を盛にし、禮樂を修め、名節を獎勵した。

(記憶筆記)

明帝以後の外征

班超の外征

(一)

班超といふものを西域に遣はした。匈奴の五十八部、北匈奴に背きて、皆、漢に降つた。班超を西域都護として、これを鎮めさせた。

(二)

北匈奴勢ひだんぐと衰へ、漢これを攻撃すること愈々急である、遂に裏海地方に遁れて匈奴は滅亡した。

三國時代

東西交通のこの時、歐洲にては、羅馬の勢が盛であつて、裏海を隔て、支那と東西二大帝國の交通が開かれんとしたけれども、中間に妨げたものが(今の波斯地方)あつて、その交通があまり振はなかつた。けれども、その後、後漢の末に、羅馬の使者が來て(皇紀八二六)交通が始まつた。

(記憶筆記)

後漢の末路

外戚の専横

後漢の國運は、一時は、隆盛を極めたものであったが、その末年の帝王は、多くは、幼年であつて、常に、母后が朝に臨みて、外戚の勢が盛んであつた。
和帝のとき、竇太后が政を攝して、その子弟親屬、皆、樞要の地を占めて、恰も前漢の末路の通りであつた。

宦官の跋扈

宦官の跋扈、朝政の紊亂、士名の奇禍

和帝、漸く、長じて、外戚があまり勝手に振舞ふのを怒つて、宦官と謀つてこれを介した。これから、外戚の勢が弱くなつたと同時に、又、宦官の専横となり、政治は、ますます亂れて、正義の士は、皆、捕へられ、人心漸く動搖して、又、戰亂の世となつた。

袁紹 河南地方を領す
曹操 山東地方に居る

(記憶筆記)

群雄割據

袁術 安徽地方に據る
劉表 湖北地方を占む
魏 徐洲にあり
公孫度 遼東を得る
孫策 江東を奪ふ

赤壁の戰

漢の疎族劉備といふものゝ初め、曹操と合せしむ、その不臣の志あることを知つて、曹操を去つて江南の孫權と結び、大に曹操の軍を赤壁に破つた。

後漢滅亡

曹操の子、曹丕、獻帝を廢して、魏國を建て、洛陽に都した。(皇紀八八〇)。漢は、前漢、後漢、通じて四百六年で滅んだ。

三國鼎立の尋いで、劉備は、成都に都し、漢の皇統を受けた。所謂、蜀の昭烈帝である。その後、孫權も、亦、建業に據つて、吳國を建て、大帝と號した。そこで、蜀、吳、魏三國鼎立の世となつた。

(記憶筆記)

三國攻争

魏の曹操

その勢は最も強く、治世の能臣、乱世の奸雄といわれた人である。子の曹丕、漢を亡し、魏の國を建て、自ら皇帝と稱へた。

蜀の劉備

國が小く、人物も少ないが、昭烈帝(劉備)が、寛仁の君であつて、諸葛亮(孔明)が、誠忠無二の人であつたから、常に、魏の國を破つた。

吳の孫權

劉備と同盟して、常に魏の軍に當つた。赤壁の戦には、名將周瑜の策を用ゐ、三十万の兵を以て、魏の八十万の大兵を破つた。後都を建業に定め、大帝と稱へた。

(記憶筆記)

諸葛孔明は誠忠無比の人であつた。始め、民間に居り、農業をしてゐたときに蜀の劉備をその名を慕つて、孔明が草廬に三遍までもたづねて、遂に、君臣の情誼を結んだのである。その魏を征伐するに當つて、前後二回までも出師の表を上つた。その表は忠烈至誠の文として、今に傳へられてある。

三國滅亡

攻争の結果

孔明の歿後、蜀の勢が衰へ、遂に、魏に亡された。魏も、次いで司馬懿の孫、司馬炎のために奪はれ吳も、亦、司馬炎に滅された。

司馬炎の統一

そこで、司馬炎は、全國を統一し、(皇紀九四〇)、洛陽に都した。所謂、西晋の武帝である。

秦以來の沿革

楚

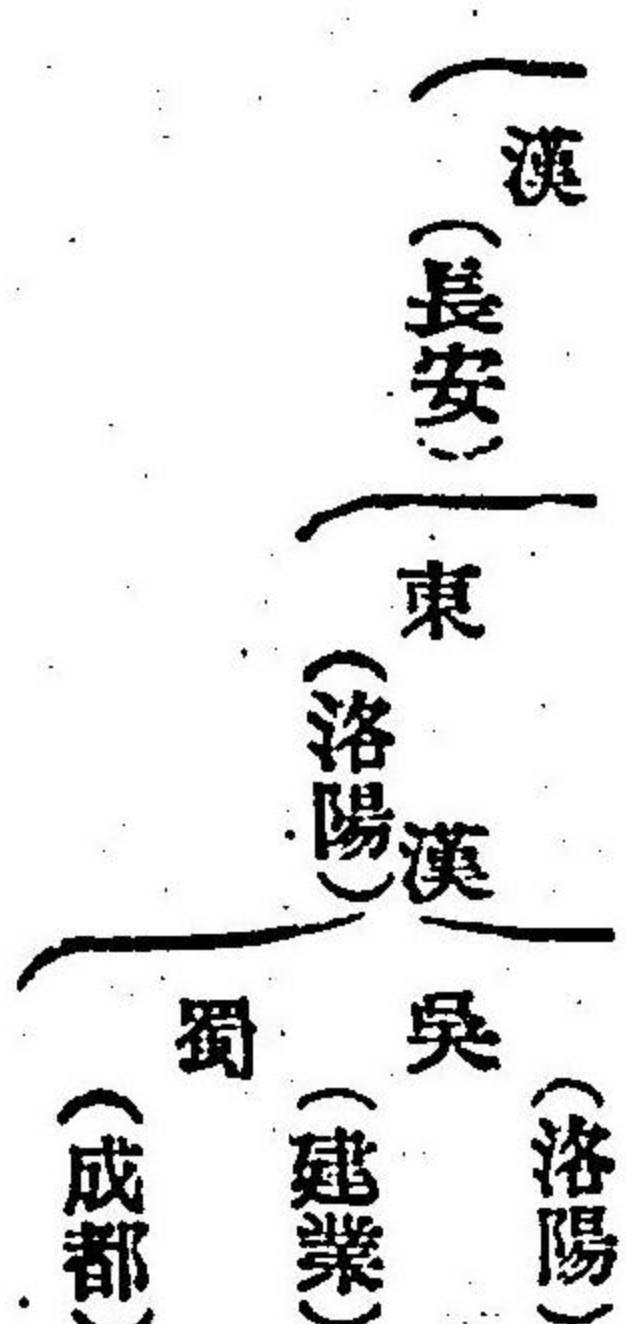
秦

(咸陽)

西漢・新

魏……………西晋

(記憶筆記)



西 晉

晉の武帝、天下を統一したる後は、魏の孤立して仆れたるに懲りて、要害の地に子弟親屬を封じて帝室と藩屏とした。

武帝の失政

- (一) 藩屏の諸王、各、跋扈し、又、内地に雜居する塞外人種の檢束の方法を誤った。
- (二) 地方の武備を怠って、夷狄侵入の基となった。

八王の亂、武帝死して、子の惠帝が立つたけれども、暗愚の主であつて、趙王

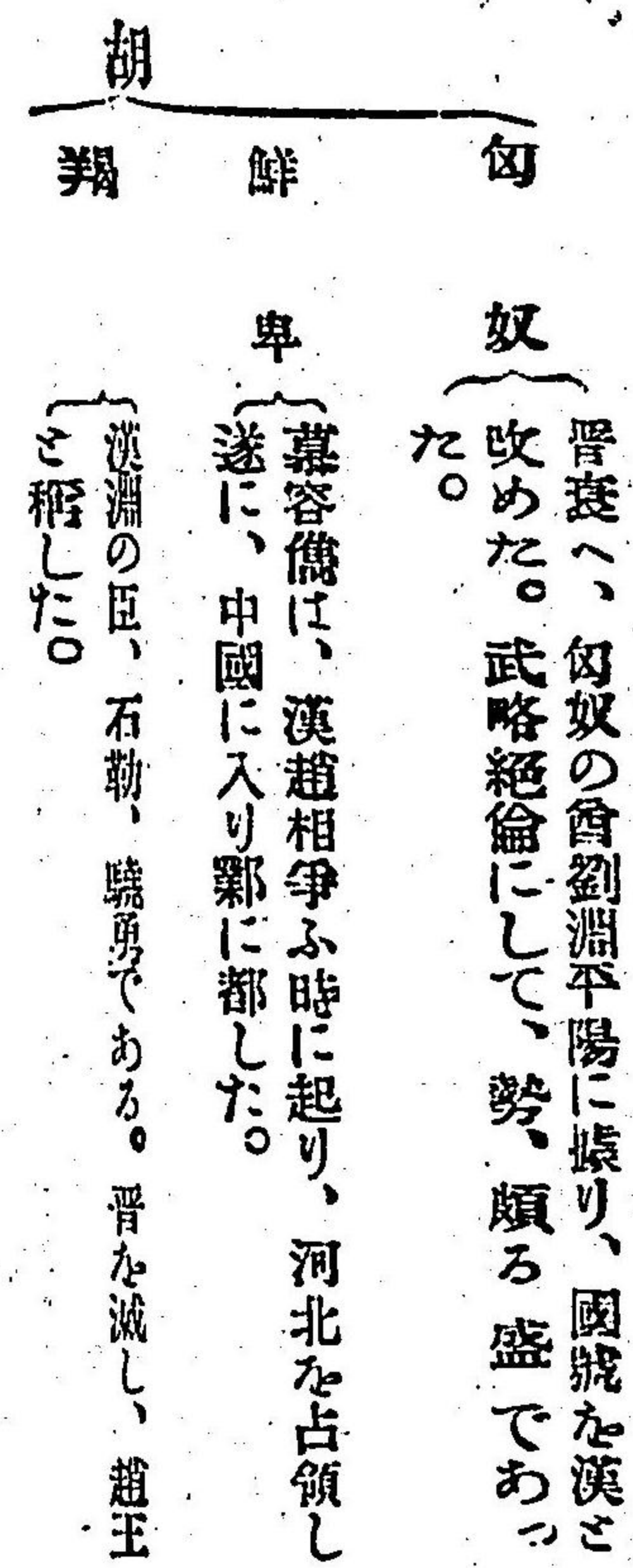
(記憶筆記)

倫といふもの皇后を殺し天子を廢した。この時八人の王、互に、政權を争ふたことが、十餘年に及んだ。八王の亂とは、これである。

老莊の學派

〔老莊の學、盛に行はれて、當時の文士、皆、清談に耽つて國家の大事を顧るものがなかつた。〕

五胡十六國、夷狄異族、四方に起り、連りに、内地に侵入して來た。この種族が五つ、國が十六國ある、これを五胡十六國といふ。



晉衰へ、匈奴の酋劉淵平陽に據り、國號を漢と改めた。武略絶倫にして、勢、頗る盛であつた。

慕容儁は、漢趙相争ふ時に起り、河北を占領し遂に、中國に入り鄴に都した。

漢淵の臣、石勒、驍勇である。晋を滅し、趙王と稱した。

(記憶筆記)

氏 羌

其酋苻健(前秦王)、王猛を用ゐ、勢、頗る強大となり、遂に、天下の八を領し、更に、九十萬の大軍を起し、江南を併呑せんとする。東晋の將謝玄、兵八万を以て、大に淝水に逆撃し、秦軍を破った、所謂、淝水の戦。

初め、青海にあって氏と共に、西戎族である酋長、姚才仲は、南安に起り、扶風公と稱へた。

かやうに、夷狄の族が繁殖するから、晋の領土が日に縮まりて、遂には、中原が守れなくなって、江南の地に逃げ出した。この地にて、僅に、晋の系統を維持して、帝位に即いたのが、東晋の元帝であった。

東 晋

淝水の戦に元帝、中原を回復することを考へたが、内亂相ついで、其志を果すことができなかった。その後、秦王苻堅(五胡中の雄傑)天下を統一せんとの志を

南 北 朝 時 代

抱き、大兵を擧げて、東晋に迫ったが、東晋は、謝安、謝玄等の名將を遣はして、大に秦軍を淝水に破った。東晋の滅亡に東晋は、淝水の戦に勝ったけれども、積年の衰勢は挽回することができなかった。この間に、後魏は(鮮卑族)ますます強大になって、遂に、江北の諸國を一統してしまつた。又、劉裕といふもの、江南を一統して、遂に、東晋を滅し、自ら皇帝となった。これが宋の高祖である。この時、江北は、全く、魏に屬して、江南は、全く、宋の有さなつて、支那は分れて、南北二大帝國となった。

南北朝の時代は、魏と宋との對立であるから、五胡十六國の時のやうに、紛擾はなかつたけれども、篡奪廢立相ついで起り、概して、紛亂の世であつた。

又、宋(南朝)、魏(北朝)は、絶へず戦を交つたが、大抵は、北朝の勝であつた。

北人は、常に、强悍勇武であつて、南人は、常に、優柔の風があつた。北朝六代の天子、孝武帝の時には、洛陽に都して風俗言語は、すべて、中國に模倣して、だんぐら、南朝の風に化せられた。それがために、文物は盛に起つたけれども、奢侈の弊害を生じて、國勢は次第に衰へた。

(記憶筆記)

北朝

後魏は孝明帝が幼年であつたから、母の胡氏が朝政を攝した。この母后は、素行が修まらなかつたが、明帝が追ひく成長してからは、母子の間が常に面白くなかつた。遂に、母后が帝を毒殺した。かやうな内亂が絶えなかつたため、後魏は、又、東西に分れた。

南北朝の沿革

その後、北周起り、西魏の後を承け、又、北齊が起つて、東魏の後を承けた。北周は、北齊の衰亂に乗じて、遂に、併呑してしまつた。

宋の文帝、後魏と戦つて大敗してから、數世を経て、蕭道成といふものが、國を奪つて、國號

南朝

を齊と稱へ、自ら天子となつた。それから、數世を経て、蕭衍といふものゝために國を奪はれた。衍は、帝を弑して、梁といふ國號を建て、帝位に即いた。これが梁の武帝である。

この時、侯景といふもの、梁を攻めた。梁の兵、大に敗れて、武帝憤死した。武帝の曾孫天子となつて、侯景のために位を奪はれた。

梁帝は、陳霸先を遣はして、侯景を討たしめた。霸先は、王僧辨といふものゝ功を争ひ、遂に、梁室の微々たるに乗じて自立し、國を陳とあらためた。これが陳の武帝である。

隋の文帝は海内統一し北朝の後周の外戚、揚堅といふもの、幼弱なる周帝の位を奪ひ、長安に都して、國を隋とあらためた。即ち、文帝である。文帝、遂に、南朝を亡し、海内を一統した。

(記憶筆記)



(記憶筆記)

南北朝時代の宗教、教育、交通

佛教の流行とその影響

以上に記する如く、南北朝時代は、争亂相ついで、闇夜の有様であつたが、ひさり、この中にあつて、光明を放つて、盛に行はれたものは佛教であつた。歴代の天子、皆、信仰して、且、これを奨励した。中にも梁の武帝は、みづから三寶の奴となつて、しばしば身を佛寺に捨てた。達磨大師が、遠く印度から、來つたのも、このときである。佛教の隆盛に伴つて、繪畫、彫刻、音樂、建築等の美術も、盛に起つた。

(44)

外國交通

政治の亂脈にも拘らず、對外交通の道も盛であつた。商船の遠航するもの、又、僧侶の印度方面に往來するもの、又、貨物の集散も少なくな

(か)った。

文章發出

南北朝の間は、文章、最も整美して、有名なる文章家も、續々この間にあらはれた。

南北朝の對立

隋の文帝は、天下大亂の後を承けて、勤儉の徳を積み心を政治に用ゐて、民力の休養を力めた人である。故に、國富み、戸口大に繁殖した。文帝の子、廣といふもの、父、文帝を弑し、兄、勇を殺して、自ら天子となつた。これが煬帝である。

(45)

煬帝の暴政

煬帝は、父帝勤儉の後を承けて、その富を濫用し、土木を起し、離宮を造り、豪華を極めた。運河を通じて、人民の勞力を用ゐたことが莫大

(記憶筆記)

煬帝の事蹟

であった。

遠征を事として、人民の租税、頓に増加し、怨嗟の聲が四方に起った。

煬帝の外征及び修交

使を西域に遣はし、これを招いた。林邑、流求、吐谷渾、等を征伐した。高句麗を征して大に敗れた。日本との交通が始まった。

煬帝の失政から、又々、國內が亂れて、群雄が起った、其群雄中に李淵といふ人がある。直に、長安に進んで恭帝を立てた。

煬帝は、巡遊中に、臣下のために殺され、李淵恭帝の禪を受けて、帝位に即位したが、これが、唐の高祖である。

隋は、僅に三世、三十七年にして亡びてしまった。(皇紀二二七七)その興亡の有様、短期の全盛、恰も秦の始皇と同じことである。

唐

唐の高祖、位に即いて、七年の後に、諸國の割據を平定して、こゝに世界的大國の業を創めた。これ、皆、次子世民といふ人の力であつて、唐の創業はすべて、この世民の畫策に出たのである。故に世民は、次子ではあるが、高祖の禪を受けて、天子となった。これが太宗である。

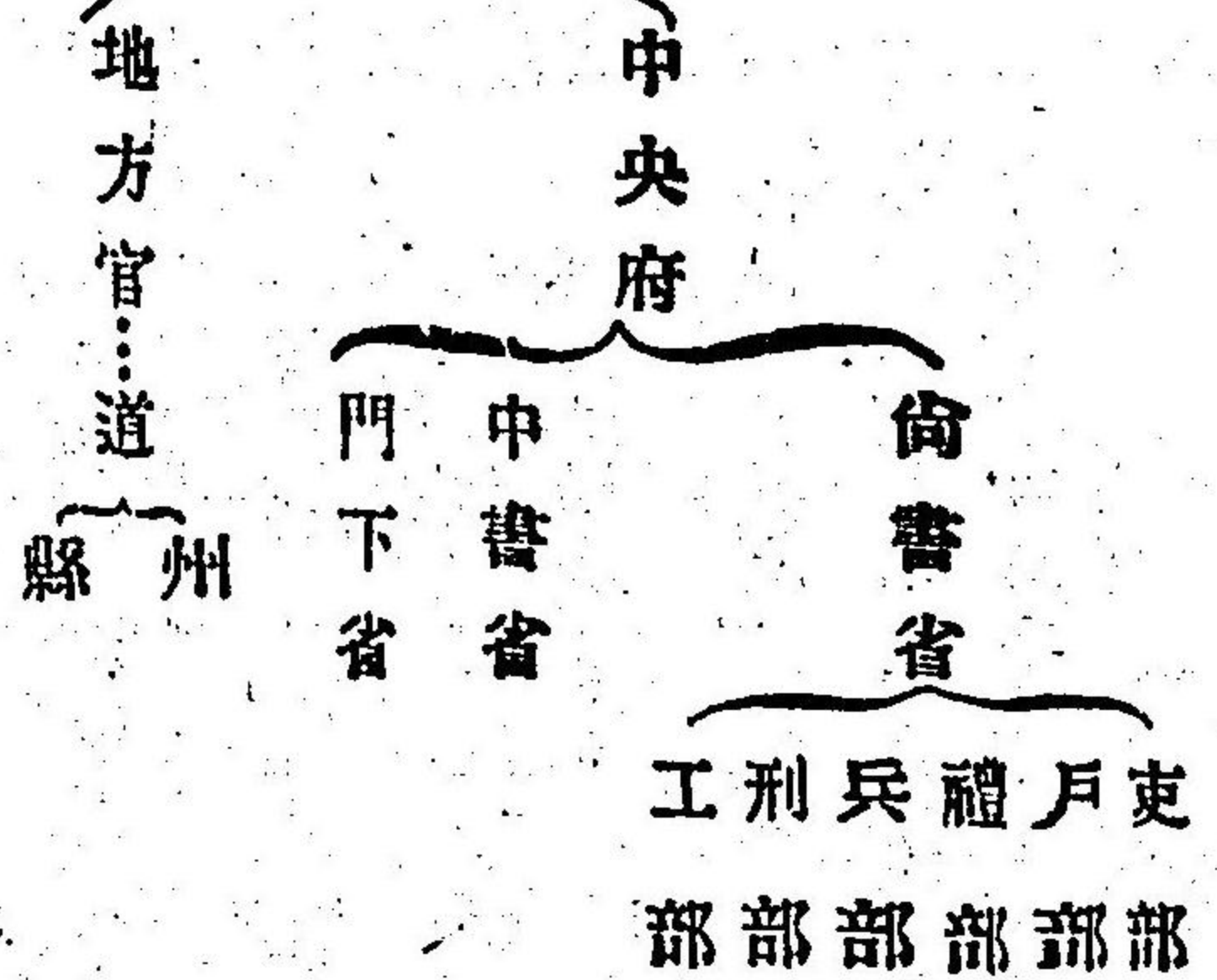
貞觀の治

賢相……房玄齡、杜如晦、
諫臣……魏徵、王珪、
名將……李靖、李勣、
文武の諸政を整理す。
治績 { 學校を興し、武備を嚴にし、租税を減じ、民力を愛用した。 }

太宗は非常の英主であつた、天下の民、皆、喜んで秦平を謳歌した。日本は我日本は唐の太宗及び高宗時代には唐と交通して、その諸制度を模倣したことが、澤山であつて、最も、注意をすべき時代である。

官 稅

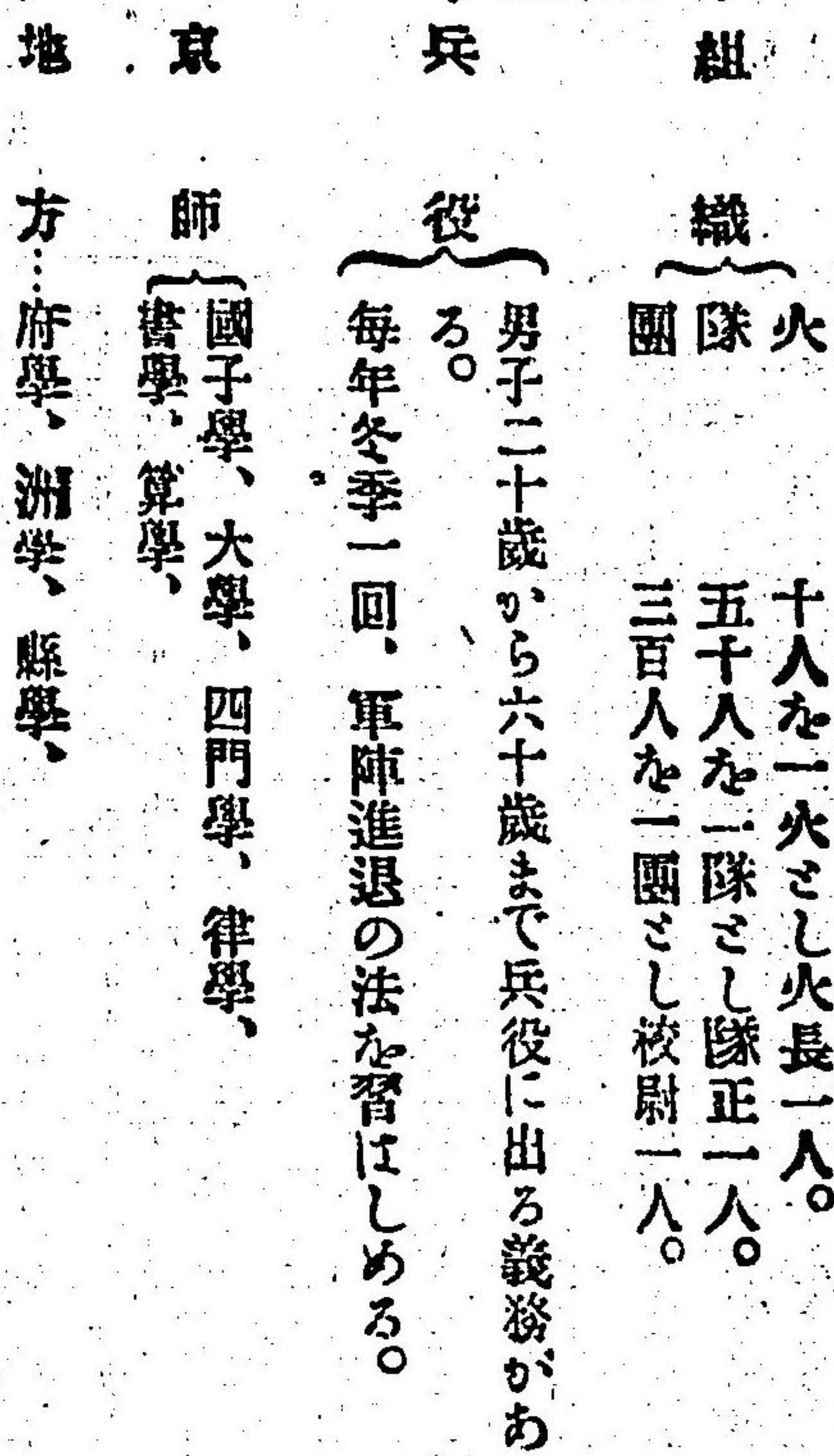
制



法
租：官田の收穫中から粟二石を上納せしめた。
庸：丁年の男子を、毎年二十日間、勞役に服させた。
調：絹、綾、綿布、麻等の産物を出させた。

兵 學 刑

制



官吏登庸法：秀木、進士、明經、明法、

法

笞：……五等(十、二十、三十、四十、五十)、
杖：……五等(六十、七十、八十、九十、百)、
徒：……五等(一年、一年半、二年、二年半、三年)

唐の外交

流………三等(二千里、二千五百里、三千里、)
死………絞。斬の刑の輕重すべて二十

(記憶筆記)

とるこ

UNEN (Turks) (突厥)は、南北朝の末から、だ
んぐ、勢が盛になつて、東は遼東、西はあら
る湖 (Amul) 南は青海から、北はほらかる湖
(Balkal) 邊にまで達して、東西の二つに分れた。
西と東とは、常に、ペルシア (Persia) を侵略し
東と東とは、常に、唐に侵入した。その後、大
宗、高宗の二帝、全く、これを滅した。

(50)

西蔵
これまでは、地勢上、支那との交通はなかつた。
しかしながら、唐の時になつて、はじめて、來
朝した。

朝鮮

この時代までに、非常なる勢を以て、朝鮮を併
呑したる新羅も、唐朝に對しては、臣の禮を執
つた。故に、唐の勢は、莫大のものであつて、

六都護府

安東都護府
安北都護府
單于都護府

滿洲及び朝鮮。
外蒙古。
内蒙古。

(記憶筆記)

日本

この諸夷族を監督するの必要上、六つの都護府
を設けたのである。
日本と支那との交通は、我が推古天皇の時、小
野妹子を隋に遣はしたのが始で、その後、唐朝
の起るに及んで、交通が甚だ頻繁となつた。我
が日本から、弘法大師、傳教大師、阿部仲磨、
吉備眞備等の遣唐使、及び留學生等の入唐した
のは、丁度、唐の玄宗の時であつた。

(51)

あらびあ

支那南北朝を経て、隋唐の初世には、西域地方
との交通が、盛に起つて、殊に、あらびあ人と
は、海路の通商が盛であつた。

(名稱)

(所轄區域)

北庭都護府
安西都護府
安南都護府

天山北路。
天山南路及び中央あじあ。
南海諸國。

六都護府の設立……唐の太宗、高宗は、主として、東、北、西の三方面を經營し、南方に兵を用ゐなかつたが、國威が加はるに従つて、今の後印度及び南洋の諸國、皆、來貢し、かくの如くして唐の政令の及ぶ所は、頗る廣大なつたものであるから、統治上、都護府を設けたのである。

則天武后の亂

唐高宗は、外征に於いては、大に、その功を奏したけれども、内は武后を寵して、禍の端を開いた。
高宗崩じて、中宗が位に登った。さうすると武后は、直に、これを廢して、豫王旦を立て、間もなく、これを廢し、自分が、直に、位に即き、國を周々號けた。これが則天皇帝である。然る

武韋の禍

韋氏の亂

に、その時、狄仁傑等の名士が、猶、朝に居たから、武氏に迫つて、遂には、廢帝中宗を召し還して、再び位に即かしめた。

中宗が位に復してからは、韋后、權を弄する、ことが甚だしくなつた。これは韋后が、はじめ中宗と艱厄を共にしたからである。
遂には、中宗を弑して、廢帝を立てた。さうする。豫王旦の子、隆基が、兵を起して、韋后を殺し、豫王旦を位に即けた。これが睿宗皇帝である。隆基、尋いで、その禍を受けて、玄宗と稱した。

節度使の設置

玄宗が即位してからは、外國の侵入を防がんがために、邊要の地に、十節度使を置き、兵馬の大權を委れて、四方を經畧せしめたから、唐の國威は再び振起した。

開元の治

玄宗の内治

玄宗は、また、意を内治に用いたから、天下泰平となり、戸口蕃殖し、文學、宗教等の隆盛を極むるに至った。

(記憶筆記)

文學の革新

支那上古の文學は、皆、達意を主としてゐたが、三國時代から、南北朝にかけて、詩、文ともに、内容よりも、字句の修飾のみに重きを置くやうになつたから、世人が漸く、その實用に不便なのを厭ふてゐた。然るに、玄宗の時、李白、杜甫の二人が出て、はじめて、詩風を一變し、玄宗の後、四十年に、韓愈、柳宗元の二人が出て、又、文体を一變し、詩文ともに、空前の發達をなし、支那文學史上に、一大光彩を放たしめた。

(54)

玄宗は、佛教、景教等にも保護を加へたけれども、格別、道教を尊崇した。道教は、道家の學說に、佛教を參酌した一種の宗教に外ならぬも

安史の亂

事

實

原

因

玄宗、末年政に倦み、奢侈宴樂に耽り、また、楊貴妃を寵愛して、その一門を重用し、國政漸く亂れはじめた。

とるこの降將、安祿山これを機とし、巧みに、楊貴妃に結びつき、帝の信任を得た。はじめ平盧の節度使となり、尋いで、范陽、河東の二節度使を兼ね、その兵力を養うて、遂に、反を謀った。即ち、河北を陥れ、洛陽をとり、更に長

〔註〕

開元の治といふのは、貞觀に比して、いふのである。開元は、當時の年號

道教の興隆

のである。玄宗の時に、これを唐の正教と定めてから、頗る流行し、玄宗七世の孫、武宗に至り道教尊崇の極一時、自餘の諸宗教を廢した爲に、唐初傳來の諸外教は、大抵、衰滅に歸した。

(55)

(記憶筆記)

安を犯して、自ら帝を稱したのである。その時
玄宗は、辛うじて蜀に出奔し、太子は、帝位に
即いた。即ち、肅宗である。

ところが、郭子儀、李光弼等の名將が來り會し
るとこの舊地に興った回紇の援兵も來たので、
俄に、官軍が振ふた。幾もなく、安祿山は、そ
の長子、慶緒のために殺され、慶緒は、賊の將
史思明に殺された。さうして、思明は、自ら
帝を稱したが、これも亦、長子朝義のために殺
された。官軍これに乗じて、遂に、長安を恢復
し、こゝに亂が全く平定した。

回紇は、娑陵河畔を根據地
としてゐた土耳古族であつて
も、東突厥に隸屬してゐ
たが、東突厥の滅亡後、こ
れに代り、漠北を占領して、

外國の
掠

回紇

唐に降服した。ところが、
安史の亂に、唐を救うてか
ら、非常に尊大となり、歲
幣を食り、婚を逼り、少し
でも、意に満たないことが
あると、直に、北邊に入寇
して、亂暴を極めた。

南詔

南詔は、今の雲南地方を占
領してゐた蠻族であつて、
玄宗の頃から強大となり、
安史の亂後、屢々、四川、
安南の兩方面を掠めた。

吐蕃

屢々、西境を擾だし、長安
を陥れようとしたこともあ
つた。

原因

節度使の跋扈

安史の亂のために、殆ど、唐の社稷を覆したが、その命脈を維ぎ得たのは、全く藩鎮の力であつた。だから節度使等は、この大切があつたのを以て、多きものは、數州の地を兼攝して、その管内の主權を握り、宛然封建の姿となり。或は、擅に、世襲したり、又は、鎮に於いて、勝手に選定するなど、中央政府を無視する舉動に出でたが、政府は、兎角、姑息に流れ、苟も事なきを希ひて、そのまゝに棄て、置いたから、ますます增長して、命を用ゐなかつた。

唐の衰滅

財政の困難

宦者の専横とその誅戮

のがあつたから、國庫は益々乏した。そこで、代宗の子徳宗の時に、租、庸、調の法を廢し、新に、兩税法を行ひ、更に、諸種の新税を起したけれども、財政の困難を救ふことは出來ないで、却つて、民心の離叛を招いた。

代宗の孫憲宗は、一時節度使を制服したけれども、まもなく、宦者に、弑せられた。玄宗が宴遊に耽つてゐた頃から、宦者が次第に信任せられて、權勢を増し、安史の亂後は、朝廷に於ける文武の大權を握り、憲宗を弑してからは、天子の廢立も、亦全くその手に歸するやうになつたが、憲宗の曾孫昭宗位に即くに及んで、

五代の世及び契丹

後梁の太祖、唐を滅して天子となつてから宋の統一まで、五十餘年、五姓十三君の更迭があつたから、これを五代の世といつたのである。

結果
(滅亡)

朱全忠が、次第に、權勢を專にし、昭宗を弑して、遂に、唐を討つた。これを後梁の太祖とする。けれども、その權勢の及ぶところは、僅に中原に過ぎなかつた。各地の節度使は、大抵これに服従しないで、各、一方に割據して、互に、攻争してゐたのである。

(汴の節度使朱全忠を招きて、悉く官者を誅戮した。)

(記憶筆記)

後

梁

朱全忠の起つたる國。十數年で、後唐に亡ぼされた。

後

唐

久しからぬうちに、後晉に亡された。

後

晉

契丹の後援によつて、北方十六州を得たけれども、後、禮を失ひ、契丹に滅された。

後

漢

後晉の將、劉知遠、大梁に入り、後漢の國を建設し、四年にして滅びた。

後

周

後漢に代り、まもなく、趙匡胤、後周を滅し、宋の大祖となった。

五代の沿革

五代の興亡

後梁
後唐
後晉
後漢
後周

後梁	朱全忠	大梁	一五六七	一五八三
後唐	李存勗	洛陽	一五八三	一五九六
後晉	石敬瑭	大梁	一五九六	一六〇六
後漢	劉知遠	大梁	一六〇七	一六一一
後周	郭威	大梁	一六一一	一六二〇

(始祖) (國都) (興起年代) (滅亡年代)

(記憶筆記)

契丹

丹

南北朝の時、漠河地方を占領せし濛兀族である。唐の末、耶律阿保機、皇帝となる。即ち太祖である。回紇の地を併せ渤海を滅亡し、更に、南下して後晋の興隆を援け、太祖の子、太宗は後晋を亡し、國を遼と稱へた。けれども漢人が少しも服さなかつたから、北に歸つた。

太祖の業

唐末以來、節度使の跋扈が、益々甚だしくなり五代の革命は、大抵、節度使の篡奪に原因した。そこで、宋の太祖は、機のあることに、文臣を以て、節度使を補缺し、かやうにして、中央集権を行ひ、多年の宿弊を掃した。

太宗の業

朱全忠が唐を滅したとき、節度使のこれに従はないものが、所在に獨立國を建て、宋の初に至つても、なほ、七ヶ國存在してゐたのを、太祖は、その弟の太宗が、前後、これを征服して、遂に、天下を一統した。

(記憶筆記)

宋の一統

交趾の獨立

交趾は、唐の安南都護府の所在地であつたから又、安南といふ。秦、漢以來、支那の一部をなしてゐたが、五代の末、支那の擾亂に乗じて獨立した。太宗は天下一統の後、これが恢復を圖つたけれども、炎熱のために失敗し、交趾は遂に一外國を形成することになった。

宋の遼の戦

太宗は、また、北邊を恢復せんがために、遼を伐ち、彼は十年餘にもなつたけれども、終に、成功しなかつた。太宗の子、眞宗のときに、遼軍大舉して入寇した。眞宗、これを澶州に防いだけれども、逆も、防ぎきれないところから、遂に、歲幣、銀十萬兩、絹二十萬匹を遼に與へて和議を結んだ。

政治

太祖の玄孫聖宗は、賢明の君である上に、國政に勤めたから、國內が、よく治まつた。

(記憶筆記)

遼の極盛

朝貢國

高麗の太祖は、宋遼交戦の際に、常に、宋と通じておたから、聖宗は怒って、遂に、これを征し、その朝貢國ならしめた。その他、吐蕃以下六十國に及んだ。

領土

西は天山に及び、南は支那の北部を併せ、北は蒙古全部を兼ね、東は、海に及んだ。而して、國中に、東京、中京、南京(今の北京)、西京、上京の五京を有してゐた。

一……… 歐陽修、司馬光、その他、名臣多く、内治は良成績を改めた。

二……… けれども、この頃、天山南路の邊を領して、帝を稱してゐる西夏國が、屢々入寇し、遼も、亦、更に求めた。

三……… そこで、宋は、已むを得ず、遼に向つては、年々の歳幣を増し、西夏にも、年々、絹、銀等を

(記憶筆記)

仁宋の治

贈ることに定めて、和を結んだ。

四……… 宋は、かくの如くに、外寇に向つて、常に、平和の主義を執つたから、夷族は、大層、宋を馬鹿にしてゐた。

唐末五代に於ける藩鎮の跋扈に懲り建國以來、その宿弊を除くに急であつて、遂に、これがために、その國力を弱くし、交趾、遼、西夏等の諸外國に對して、常に、失敗を重ねた。

二……… 年少氣鋭なる神宗が即位するに及んで、この國辱を雪がんと志し、まづ、財政整理の必要を認めた。

目的 富國強兵である。そこで、王安石を登庸して、執政となした。

(記憶筆記)

事

實

富國策

青苗法

插苗の時期に、朝廷から百姓に資本金を貸興し、秋熟の時期に、二割もしくは、三割の利子を添へて、還附せしむる法。

募役法

人民に相當の免稅を納めしめて、服役の義務をとき、朝廷は、別に、無職の民を募りて役に立てる。

京都に市易務と官省を置き、市場に賣れない商品を購

(記憶筆記)

神宗の新法

方

法

強兵策

保甲法

一種の民兵制度であつて、十家を保とし、五百家を都保とし、都保に正副長二人を置き、弓箭を蓄へ、部下の保丁をして、武藝を講習せしめる。

市易法

買し、又は、官物と交換し、もしくは、商人に資金を貸附し、規定の利子を納めさせる法。

(記憶筆記)

結果

外國經略の失敗

神宗は、はじめ西夏を滅し、交趾を降し、さうして後、力を遼に専にし北邊を恢復せんと志した。けれども皆、意の如くならなかった。のみならず、遼は宋の西夏と難のあるを機とし、却て、その北邊を侵略した。即ち、神宗の政策は外國經略に全く失敗し、あまつさへ、國內に於ける黨争の基を開いた。

保馬法

保丁に官馬を貸與し、その死病したときは、相當の辨償をなさしめる。

(68)

(記憶筆記)

新舊法黨の軋轢

保守的政治家は、その祖宗の制に背くのを非難して、これに反對し、かやに、政治家中に、新法、舊法の二派を生じて、政權を争奪することが三十餘年に及んだのである。

遼の衰運

宋の衰ふるにつれて、遼も、また、衰運に向つた。道宗の世に至つてからは、士風が柔弱になり、且、陪臣が權を弄し、政令は次第に亂れて來た。天祚帝が繼いで、無道であつたから、衰運は、いよいよ回すべからざるに至つた。會その背後に金人が起り、遂に、遼は滅された。

(69)

金の興起

金すなはち女眞は、遼の盛なるときには、一部は臣伏し、一部は保護を受けてゐた。あくなきいふものが、その酋長となるに及んで、遼と絶つて、屢々、遼兵を破り、國を金と號し、皇帝と稱した。即ち金太祖である。

(記憶筆記)

宋、金、遼の興廢

金宋の聯合

これより以前に、宋の徽宗は、金と合して、遼を圖らうとして、挾攻のことを議した。

一……金は北から遼の中京を攻め、宋は同時に、遼の南京を撃つこと。

二……事が成立した曉には、かつて契丹に割いた支那の地は宋に復し、金は残の遼地を収めること。

三……宋は遼に納れた歳幣を、金に贈ること。

ところが、金太祖は、遼の上京、中京を取り、天祚帝を追撃して、西京を陥れた。けれども、宋は、南京を攻めて、よう抜かなかつた。そこで、太祖は、進んで、これを略した。而して、

(記憶筆記)

遼の滅亡

宋の怠敗を責め、前約を棄て、僅に、燕京附近の地を宋に與へて、しかも、歳幣を増さしめた。

遼の天祚帝は走って、西夏に依らうさせられた。ところが、西夏は却って、金に通じ、帝は遂で捕へられ、遼は滅んだ。

西遼國の建設

天祚帝の一族耶律大石、西走して、中央亞細亞に入り、西遼國を建設した。

金軍南下

金の太宗、南侵して、宋を伐ち、燕京を陥れ、長驅して、汴京に迫った。宋徽宗は恐れて、位を欽宗に禪り、金に謝し、幣帛を納れて和を請うた。(第一回講和)。

宋の南遷

欽宗の弟、高宗位に即き、金の鉛鋒を避けて、楊州に遷り、杭州に遁れ、ついで、臨安に都を定めた。これから以後を南宋と名づける。

(記憶筆記)

宋金の交戦

秦檜の議和

宰相岳飛、張浚、韓世忠等が、しきりに、金軍を破って、學者も、また、開戦を主張した。宋の宰相秦檜は、斷然講和を主張し、岳飛等を殺し、學者を抑へた。さうして、次のやうな條件の下に、和を結んだ。(第二回講和)。

講和條件

- (一) 西は大散關、東は淮水を以て二國の境界とする事。
- (二) 宋から銀二十五萬兩、絹二十五萬匹の歳貢を金に納れる事。
- (三) 宋帝は金の封冊を受ける事。
- (四) 金は徽宗の梓宮と、章太后を宋に還附する事。

(記憶筆記)

小宋金の康の

金の熙宗が弒せられて、世宗が立ち、意を内治に傾け、また、和を宋に求めた。宋孝宗は大度英明の資があったから、歳貢の金帛各五萬を減じて和講を許した。(第三回の和議)。さうして君臣の關係をやめて、叔姪と稱することにした。これから兩國とも、内治を圖って、殆ど四十年間、南北共に、平和を保ち、やゝ、戦亂の餘弊を脱することが出来た。

宋金の徽の

金は、世宗の後、章宗が繼ぎ立ち、國威が餘程衰へて来た。宋は、孝宗から、寧宗に至り、韓俯胄が威權を弄して、金を伐ち、却って大敗し、章宗の怒に觸れたから、寧宗は俯胄を殺して金に謝し、歳貢を増して和を乞ひ、兩國の關係を伯姪に改めた。(第四回講和)。これからさういふものは、金、宋、ともに、衰運に向ひ、遂に、蒙古が北方に興って、兩國を併呑することになる。

(記憶筆記)

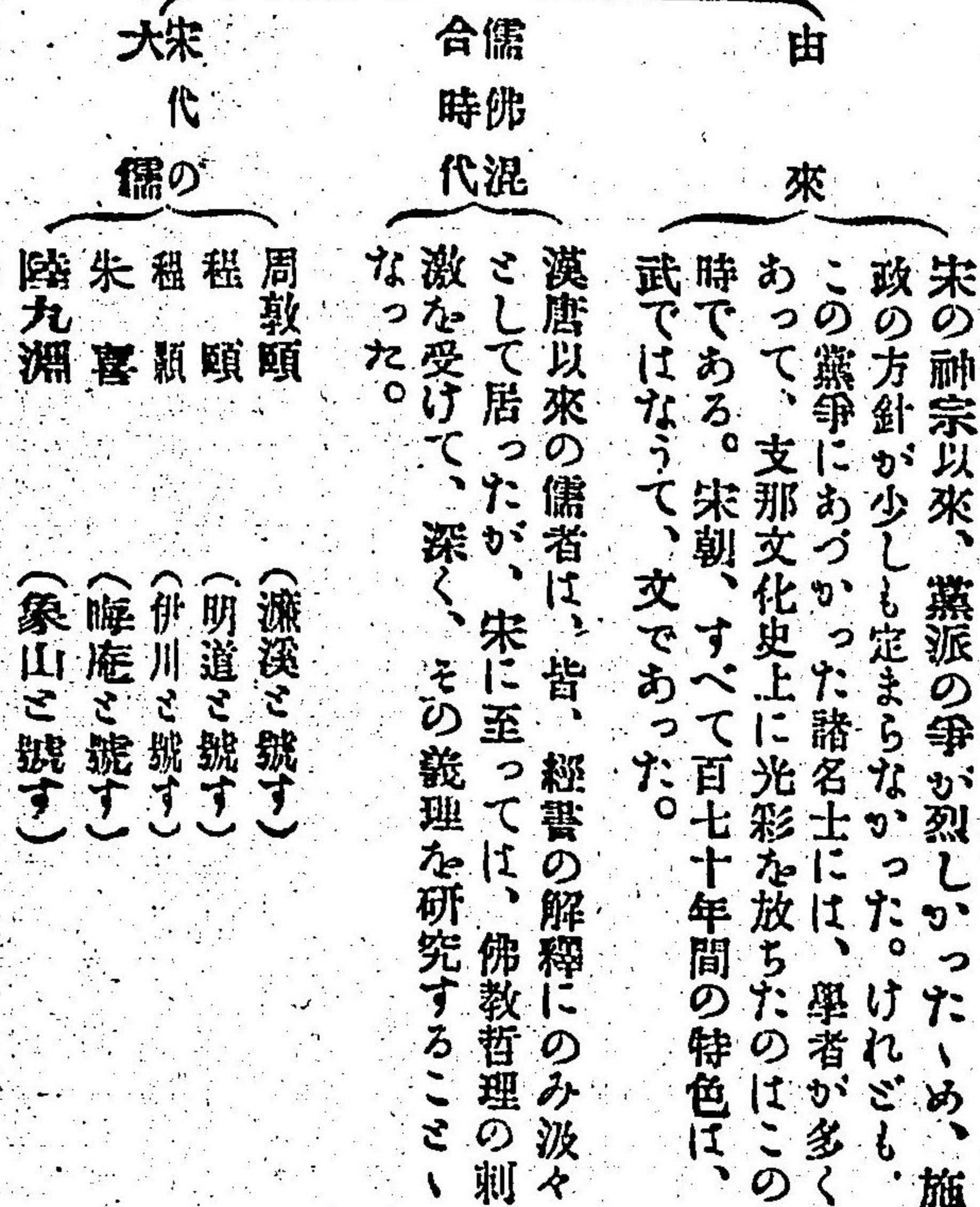
宋代の學術、技藝、宗教

(記憶筆記)

東洋歴史

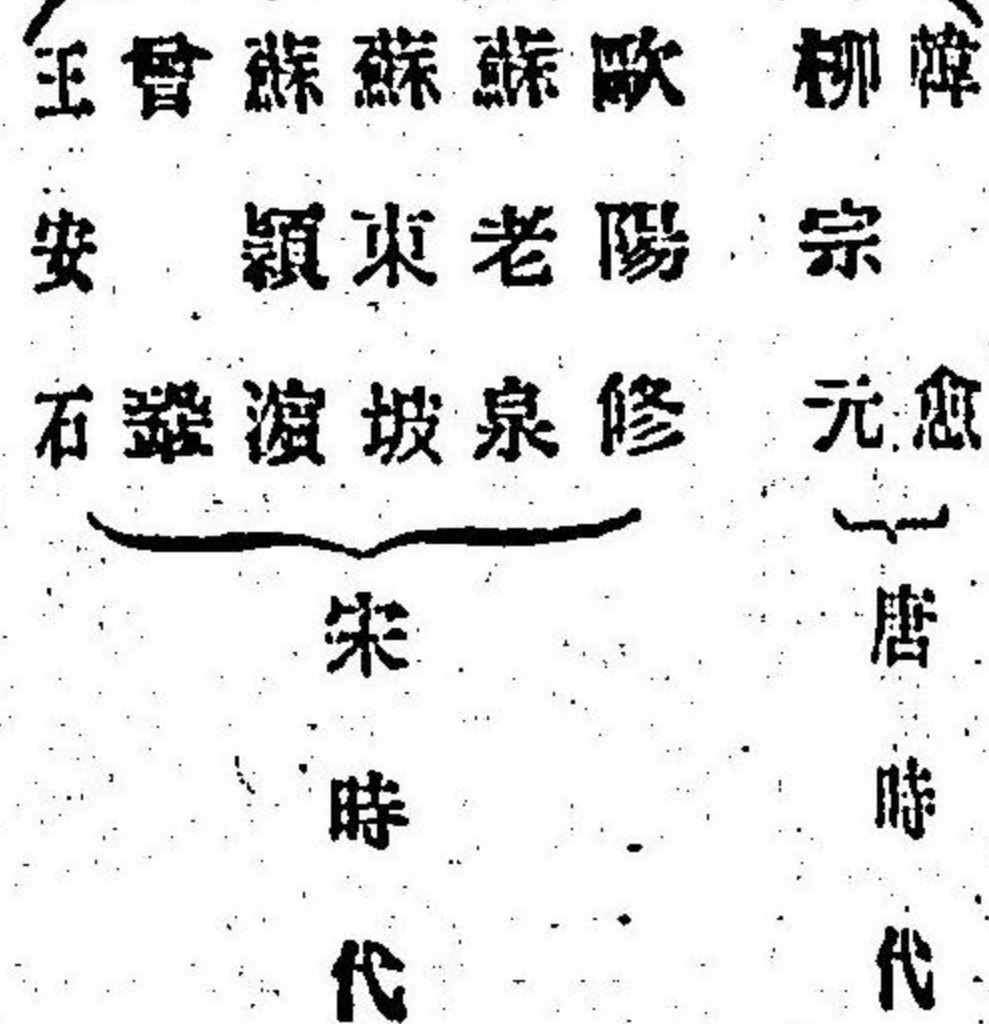
儒

學



東洋歴史

唐宋八大家



【註】 いづれも、皆、徳性心悟を主としたもの。

〔歴史〕 司馬溫公勅を奉じて、十九年の歳月を費し、編成した資治通鑑である。その他、歐陽修の新唐書、及び新五代史、朱熹の通鑑綱目等。

〔詩文〕 詩文は、宋の太祖以來、文物再興の風があつて、殊に、宋末、文天祥の文、陸遊の詩ともに名高きものである。

(記憶筆記)

蒙古(元) 近古史

〔佛教〕 佛教中の禪宗は、宋の代に於て、最盛に行はれた、當時、學者の禪學を兼修するものが、甚だ多かつた。

興起

蒙古は、黒龍江の上流、^{ナリエン}幹難、及び^{ヤルケン}克魯倫、兩河の間に遊牧して、^{チンギス}遂、金に貢を納れて居つたが、その後、^{チンギス}鐵木真といふもの酋長となつて、二十二年も立たないうちに、^{チンギス}蒙古、^{チンギス}滿洲、^{チンギス}中央亞細亞、^{チンギス}西北亞細亞を、皆、版圖の中に收めた。その成功實に驚くべきものである。これが、元の太祖である。

元の太祖は、西夏を襲ひ、更に、金を討ち、一時は和を結んだが、久しからずして、和、又、破

太祖の武略

侵畧

れた。太祖自ら將となつて、金に迫つた。金主燕京(金の都)を保つことができないで、遂に、^{チンギス}汴京に遷つた。黄河以北の地、全く蒙古のものとなつた。

西遼

これより先、遼の亡んだ時、王族、^{ユリヤシ}耶律太石、餘例を率ゐて、中央亞細亞に奔り、都をばるかして、^{チンギス}湖南に定めて、次第に、附近の地方を平定して、國を西遼と名けた。その勢甚だ強盛であつた。

乃滿部

乃滿部が元の太祖に亡され、その遺族が西遼に依つて復讐を圖つた。遂に、西遼の王位を奪つて、^{チンギス}さまるかんとに都して、勢、次第に強大となつた。太祖は金の征伐から歸りて、直に、兵を出して、^{チンギス}くしゆるくを攻め殺し、悉く、西遼の地を取つた。

花刺子模滅亡

ほらずむ人の國主、まほめつと、土耳其の一種が猥りに蒙古人を殺したから、太祖は大に怒って、その四子と共に大軍を率ゐて、ほらずむに侵入し、まほめつとを討ち、これを裏海中の孤島に追ひつめて、これを殺し、その附近の地を平定し、七年で東に歸った。

太祖、再び、西夏を討ってこれを滅し、更に、金を滅さんとして果さず死んだ。四子、即ちその地を分領した。

太祖は、性質深沈で大畧あつて、最戦争を好み、兵を用ゐること神のやうであつた。その雄略は、今に稀れである。元來、蒙古人は、粗剛蠻風を保守して、開化柔弱の風は最も少く、又、その軍紀が嚴であるから、戰鬥力が最も強い。然るに、この時、金も、漸く衰運に赴き、その他の諸異族も強いものがなかつたから、實に、蒙古に勃興の好機を興へた。

即位
太祖崩じて第三子(窩闊台)が立った。これを太宗といふ。父に劣らぬ英武の人であつて、哈喇和林に都を奠めた。

(記憶筆記)

太宗の事蹟

金の滅亡

太宗亡父の志を嗣ぎ、金を討った。金主は汴京を棄て、蔡洲に奔った。太宗使を宋に遣はして、金を挟み討つことを議した。宋は、これを承諾して、兵を出し、蒙古軍と共に蔡洲城を圍んで、これを陥れ、金主を滅した。

高麗降服

内亂に乗じ、大遼は高麗の北邊を侵した。蒙古の軍、大遼を降し、高麗も、また、蒙古に降服した。

太宗西征を企て、拔都(朮赤の子)を將とし、東歐の阿羅思を攻めた。(阿羅思は露西亞のことである)。

歐洲蹂躙

南進一隊の元軍は、匈我利に入り、北進の一隊は波蘭に攻め入った。この時、歐洲の諸強國は大に恐れて、波蘭、及び獨逸の諸王侯騎士、郷兵等の聯合軍を發して、蒙古の軍に當ることになつたが、あゝるすたつどの戦に大戰して、蒙

(記憶筆記)

古軍の大勝利となった。實に、その猛烈の勢は一時、歐洲各國を震動せしめた。

(記憶筆記)

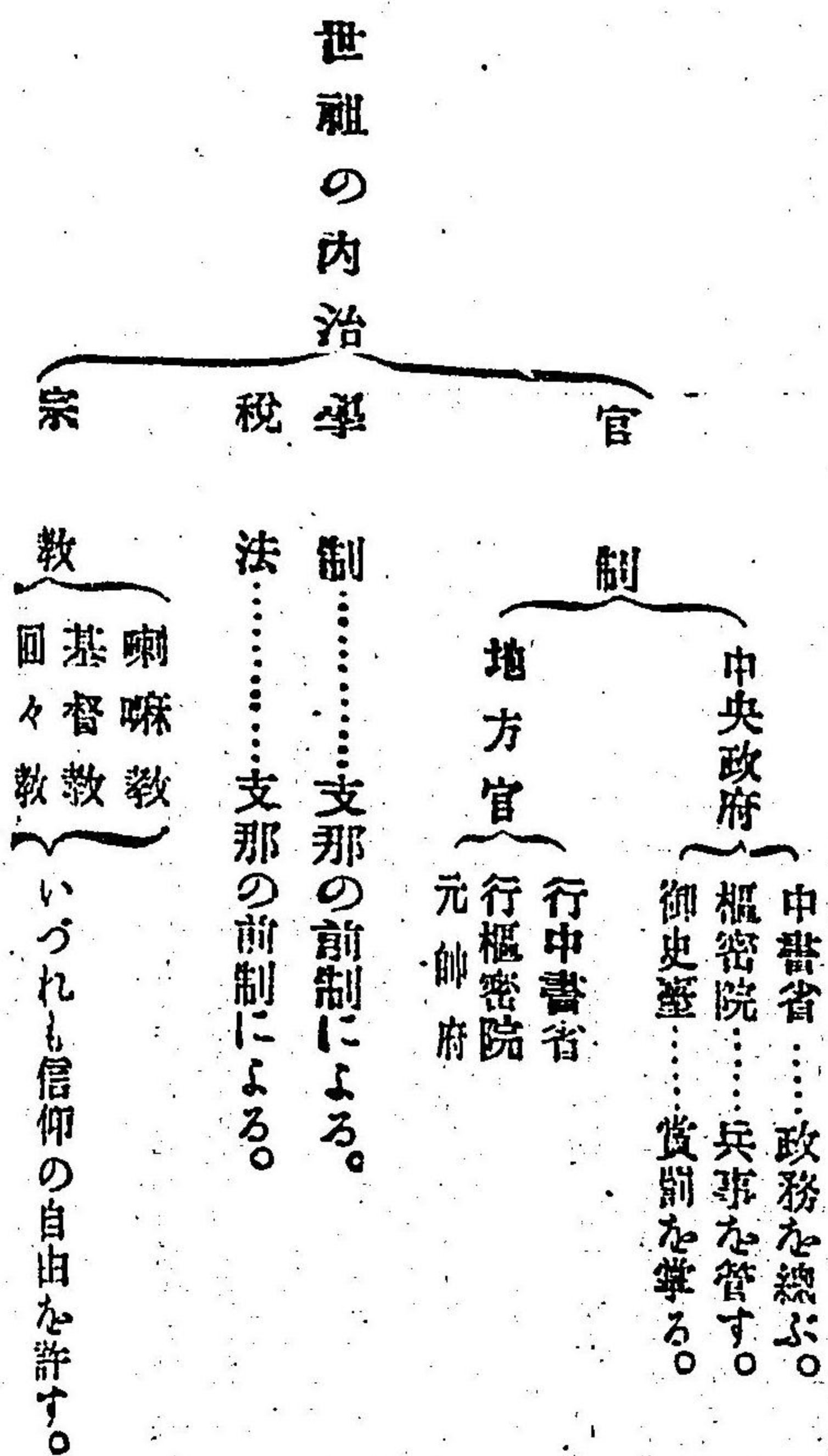
折悪しくも、この時、太宗が死に、子の定宗が立った。僅に三年にして、又、死んだ。太宗の第四子(拖雷の子、憲宗が立った。この時、太宗の孫失烈門を立てやうと計ったものがあつた。けれども、不成功に了つた、これが後日、この大帝國分裂を爲すの基であつた。

憲宗の事蹟

南 征
 憲宗位に即いて、その弟忽必烈を遣はし、南方大理國を降し、吐蕃交趾をも攻畧せしめた。

西 征
 憲宗、みづから將として忽必烈に協力して、宋を討ち、中途にて死んだ。弟ふらくは命により波斯、小亞細亞の回教徒を征し、更に、しりあから埃及に侵入せんとしたけれども、憲宗の死によりて師を旋へした。

憲宗は出征中に死んだから、宗朝擊滅、蒙古一統の功は、忽必烈に歸してしまつた。忽必烈は、彼の有名なる世祖のことである。世祖は、開平カイピンで大汗となり、國號を元と稱した。



(記憶筆記)

世祖の東征

高麗

元

【其他】

元の太祖は、曾て、高麗を助けて、契丹を撃退したけれども、太宗の時は、高麗王高宗、元の意に逆うたから、太宗は大に怒って、全く、高麗を左右したけれども、その反服に常がなかつた。そこで、世祖に至って、再び征服せられて、全く元の外藩となった。

序

幕

世祖が位に登るに及んで、高麗王を介して、日本を招致せんと思ひ、幾度も書を送って、來聘を促した。けれども、鎌倉の執權北條時宗は、その無禮を怒って、皆、これを斥けた。

文永の役

そこで、世祖は、日本を伐ち、九州の沿岸に寇をした。ところが、まん悪るくも、暴風雨に逢うて、空しく

【記憶筆記】

日本

元

弘安の役

敗れ還った。(西紀一二七四年)

世祖は、なほも、屈しないで、まづ、高麗王に、その女を嫁して、おのれの心腹となし、更に、使を遣はして日本に諭さしめた。

時宗は、またも、これを鎌倉に斬った。世祖の激怒は益々甚だしくなり、當時宋を滅した餘勢に乗じて、大軍を發し、高麗の兵を合せて、來寇しまづ、大宰府を犯した。わが軍は、よく防いで、敵をして、一步も上陸せしめなかつたが、彼是する中に颶風が俄に起つて、元の軍艦は、全く覆没した。(西紀一二八一年)

故

案

世祖は、大に憤慨したけれども、丁度、その時に、南方との交渉が急で

【記憶筆記】

元の領土

版圖膨脹

元は、太祖から以下数代の間、絶えず、四方を
經略したが、世祖に至っては、その領土は、實
に歐、亞二洲に跨り、空前絶後の大帝國を建設
した。

「あつたから、遂に、再舉を圖る暇が
ないつた。」

(記憶筆記)

四汗國

- 一、きつぶちやつく汗國(今のろしき地方)
- 二、いる汗國(今のペルシヤを領し、ふらうを
の所封)
- 三、じやがたい汗國(今の中央あじあの地)
- 四、ねごたい汗國(あるたい山附近の地)

交通機關

「官道を開き、宿驛を設けて交通機關を完備せし
めた。」

「歐、亞二洲の交通貿易が盛に行はれ、南方支那

歐亞の交通

貿易繁盛

の泉州、福州諸港は、實に、當時、海路の要衝
に中り、繁昌の貿易場であつた。

外國人の
登用

いたりあのまるといぼろ一をばじめとして、あ
らびあ、ペルシヤ、ふらんす等の學者、軍人、
畫家、建築家などが陸續來つて、元朝に仕へた。

學藝の
傳播

天文、數學、砲術等の歐洲の學藝は東亞に傳は
り、支那の羅針盤、火藥、印刷術などは、また、
西歐に傳はつた。

特種なる蒙古の相續法が、なほ、存
してゐて、成宗以下八代の間、多少
繼承の争を免れることが出来なかつ
て、これがために、權臣專横の因を
なした。

世祖以來、喇嘛教を尊んで、僧侶の
專横を來し、姦民の暴惡を招いた。

(記憶筆記)

元朝の衰微

主因

一

交鈔を濫發して、財政を亂し、收斂を行ひ民心を失うたこと。

二

權勢を中書に集めて、大臣の跋扈を招いたこと。

三

世祖以來、漢人を重用せないうで、不平を懷かしめたこと。

結果

成帝以下、殆ど、四十年間數朝に亘り、騷亂の已むこといふは、なかつた。

求赤

チヤカタイ
察合台

拔都

(欽察汗國王)

(察合台、汗國王)

三定宗

(記憶筆記)

世太祖

世太宗

合失……海都

四憲宗

世五世宗

旭烈兀
阿里不哥

(伊兒汗國王)

明の初世

明の興起は始め韓山童といふもの、元の衰運に乗じて宋の後裔であると詐り、直隸の地に反旗を翻へしたが、軍が敗れて捕虜となった。その臣福通身をのがれて、山童の子、韓林兒を奉じて宋帝と稱へさせた。又、江蘇から張士誠、李二等が起りて、又、安徽の地から郭子興が起り、浙江から方國珍が出で、徐壽

(記憶筆記)

輝は湖の南北を取って、天下は、正に鼎沸の勢であった。

朱元璋は、郭子興の部将であったが、その威望子興を匿して、遂に、これに代つて將軍となった。徐壽輝は、その部将、陳友諒のために殺され、友諒は士誠を謀って、東西から元璋を挟み討たんとしたが、元璋は、友諒を鄱陽湖に逆撃して、これを殺し、更に、師をかへして、張士誠を殺し、餘勢を以て方國珍を降服せしめた。

かゝる天下亂雜の有様であるのに、元の諸王大臣等は、尙、墻に闕いで、心を政權の興奪に奪はれて居ったから、朱氏の軍が攻めて來たのに驚いて、大に狼狽し、これを防ぐ遠がなかつた。倉惶として、開平に走った。遂に、天下は、皆、朱氏の有さなつた。

太祖の皇后馬氏、賢徳の聞え高く、太祖の兵を擧げたときから、常に、軍中に従つて、艱苦を共にした。その皇后さなるに及んで、又、内助の功が多かつた。

明の太祖||朱元璋は、幼くて父母を失ひ、孤立して據る處がなく。寺に入つて

(記憶筆記)

僧となり、又、乞食までした人であったが、嘗て、漢の高祖、身を一布衣より起して、天下を統一したことを聞いて、大に感奮し、亂世の風雲に乗じて、かかる大業を成功した人である。

帝都 太祖洪武帝、朱元璋、位に金陵(江蘇省江寧府)に即いた。

版圖 元兵を開平に滅し、漠南、滿洲、皆、版圖に入つた。

國防 遼東、大寧、大同、洮洲に行都指揮使を置き、邊警に備へ、地方には、布政使、按察使を置いた。

藩屏 諸王を要地に封じて、帝室の藩屏たらしめた。但し、領土を興へないで、俸給を興へた。北邊の諸王のみには、必要上、自由に征討するの特權を興へた。これが爲に、諸王の權力が次第に

太祖の政治

(記憶筆記)

靖難の役

政治

増大した。

内治に力を盡し、吏、戸、禮、兵、刑、工、六部に政務を分掌せしめ、宰相の政權を專にすることを防ぎ、大明律を定め、教育は、程朱の學説を用ひ、學校を起し、科學の法を定めた。

原因

太祖崩じて、孫惠帝が立った時、前朝に封置せられた諸王中、その勢の漸々強大なるものがあったから、帝も、その横恣を恐れて、強ひてその勢力を弱めんことを圖り、或はその位を廢し、或はその地を削ったから、諸王が安心することができなかつた。

(記憶筆記)

結果

豫て、北邊の鎮たりし燕王棧(惠帝の叔父)、君側の姦を清むるを稱して、兵を燕京に擧げ、連りに王師を破つて金陵に迫つた。元の降卒は、概ね、燕王に歸した。又、惠帝の宦官が、燕に内通したものがあつたから、金陵

は遂に陥り、惠帝は身を入中に投じて燒死した。

燕王自立して天子となり、都を燕京に遷して、北京順天府と號した。これが、即ち、明の成祖である。

この時、方孝儒といふ名儒あつて、この惠帝の難の時には、堅く節義を守つて成祖の招に應ぜなかつた。成祖が位に即いて、懸命を以て、即位の詔書文案を依頼されしとき、燕賊篡立の四大字を書いて、成祖の不義を痛罵し少しも應ぜなかつたために、遂に磔刑に處せられた。その罪に坐せられて、誅せられたものが數百名に及んだこと。

南征

成祖一代は、明の最盛時期であつて、又、英武の君である。惠帝の海外に逃亡したることを疑ひ、官者、鄭和に命じて南洋諸國に七回までも遣はして、明の威徳を示した。これによつて、南洋及び印度洋、沿岸の三十餘國との交通が盛

(記憶筆記)

成祖の遠征

北伐

に起り、安南地方からしやむ、すまとら、じや
わなどの各國も、皆、風を望んで、前後入貢す
るこも、なつた。實に、支那水師の大活動を現
はしたのは、歴代中の第一である。

又、北方蒙古地方の餘衆を鎮めんため、成祖自
ら將となつて、漠北に向て、これを降し、又、
當時、北部に隆盛を極めて居つたらぬら部を討
つて、その酋長を降した。

欽察國

欽察國は、歐亞に跨れる大版圖を有
し、拔都の子孫相嗣いでこれに君臨
し、一時は、甚だ隆盛であつたが、
その血統の絶ゆるに及んで、屬國諸
汗の紛争やむごきがなかつた。

伊蘭國

伊蘭國は、元室に從服すること最も
忠實であつたが、たびたび、欽察國
の侵入を蒙り、國威次第に衰へた。

帖木兒の兼併

三汗國

察合台國

察合台國は、先に海都を助けて、元
室と相争ふたが、海津死してその子
察八兒、元に降つてから、國內漸く
亂離の有様を呈した。先不花の死後
たびたび外寇を受け、四十年間に十
五帝の更迭があつた、とくるどが帝
位を嗣いだした時、大軍を起して、中央
亞細亞を征服せんとして兵を出した
その時蒙古の疎族に、帖木兒といふ
ものがあつて、直にこの部下に入つ
たが、已にして本國に内亂が起つた
ものだから、中央亞細亞の遠征隊は
餘義なくその軍を班へした。

帖木兒の偉業

元末に於ける三汗國の状況、かくの如き特に當
つて、成吉思汗の後裔と稱ふる帖木兒は、さま
るかんどから起つて、諸汗國の衰亂に乗じて、
漸次にこれを亡した。

次で、印度を征服し、小亞細亞に向ひ、土耳其

(記憶筆記)

帖木兒ニ意思強固の人であつて、嘗て、目的を變更したことがない。好んで、英傑の傳記を読み、又、心を外國の地理及び政治に止めた。帖木兒一世の中、二十七國の王冠を有し、三十五回の大戦を経た人である。

帖木兒の頓挫

帖木兒は、明を討ち元の仇を復し、遂には、世界を一統せんことを思ひ、東征の大軍を起したが、軍中で病死した。死後その版圖は、瓦解したが、その五世の孫はべる王が印度に、むがる帝國を建設した。

威祖の外征、その功を奏したと共に、又、内治も宜しきを得たのであつた。我足利將軍義滿がしばしば使を明に送つて、通商を營んだのは、この時であつた。爾來、我國諸侯との交通もあつて、我國の工藝美術上にも、幾分の感化を受けた。これが明の永樂時代である。

成祖の後、仁宗、宣宗の時、賢相、相並びて政を助け、明朝の治は、この時が最盛の時であつたが、英宗以後になつてからは、内憂外患、並び起つて遂に明室は滅亡するに至つた。

初め太祖は官、官の政事に預ること
を嚴禁したが、成祖は宦官の内應を
得た爲に、位に即くことができたか
ら、大に、これを徳として重用した
ので、宦官が累代、朝廷に跋扈する
に至つた。

明の衰亡

内憂 宦官の横

瓦剌の侵入

瓦剌は、元、蒙古の一部であつて、
はるか湖邊に住した。英宗の時、
明に侵入して、英宗を捕虜にした。
その後、たびたび明に侵入したが
明では、英宗の弟、景帝を立て、固
く守つて屈せなかつた。又、勤王の
師、四方から起つて、官軍の勢が大

(記憶筆記)

外患

に盛になつたから、瓦剌は遂に攻めあぐんで、英宗を歸して和を結んだ。

(記憶筆記)

韃靼の侵入

韃靼部は、元の滅後、その勢甚だ強くなつて、内外蒙古を一統ししげふ、明に侵入して、その北邊を攻掠した。

倭寇の侵害

かく、蒙古の餘類が、北邊に出没して、騷亂のたへまがなかつたのに、又、東南海には、我國海賊の侵害があつて、大に苦んだ。この時、我國は南北朝の時代で、南朝が破れるに及んで、その遺臣流民海を越え、朝鮮の沿岸を荒したのが、即ち倭寇の始である。それから、四國、九州邊の不良の徒も、追ひ／＼加はつて、中々、猛勢であつた。朝鮮から使を北朝に遣はして、その取締を照會した。日本でも、これを嚴重に取締だけれども、その功はなかつた。明の太祖の時になつて、倭寇の患ますます甚だしくなつて

これが防禦に力をつくしたけれども、又、功がなかつた。それから、成祖のときになつて、使を日本に送つて、又、これが取締方を照會した。その時、日本は、足利義滿が將軍であつて、明と交通することを喜んで、それがため倭寇を取締ることに力を盡した。依て、一時は中止の姿となつた。足利氏の末には、日本も戦國時代であつて、浪人達が徒を結んで、明の沿岸に出没して絶へまなく明を苦しめた。明の將軍これを討ちて、大に倭寇を殺した。それから、倭寇の勢が折れたけれども、餘黨、臺灣に據つて相變らず掠奪を擅にした。

建國

高麗の將、李成桂は、倭寇を擊退した功によつて、國人の心を得、遂に篡立して王位に即いた。これが朝鮮の太祖である。尋で明の封冊を受けてその外藩となつた。

太祖八世の孫、宣宗李胎の時、我豐臣秀吉、日

(記憶筆記)

朝鮮

征伐

本全國を一統するに及び、朝鮮をして明を討つ
の嚮導をなさしめんとしたけれども、朝鮮が従
はなかつたため、秀吉は、先、朝鮮を征伐する
ことになつた。その兵鋒甚だ鋭く、八道を席卷
した。宣宗義州に走って明の援兵を乞ふた。明
の神宗大兵を發して、朝鮮を救ふたけれども、
大敗して遂に和を我國に求めた。然るにその後
和議、又、敗れ、日本軍再び朝鮮を蹂躪したが
戦半ばにして秀吉が斃じた。

明は、この戦争の爲に、將士を失ひ、軍資を出すこと多く、國勢ますます衰微
した時に、こゝに、又、一つの強敵が現はれた。即ち、滿洲族は非常の勢を以
て勃興して來たのである。

朝鮮の役後、明朝の財政大に紊亂し、その上、
明の太祖のとき、力めて言論の自由を興へた習
慣があつて、各、黨を結んで相排斥した。神宗

明の末世

二

の時には、儒者顧憲成、意見の合はぬため、官
を辭し同志を集めて、東林書院を建て、滿腔の
不平を漏すため、盛に、政府の攻撃をした。

喜宗の時になつて、顧憲成の反對黨なるもの、
宦官魏忠賢帝の乳母客氏と結んで、専ら賢士を
排斥した。これから魏忠賢の勢力大に加つて、
内外の大權悉くこれに歸した。

殺宗その後を承けて、帝位に即き、魏忠賢、客
氏を殺し、悉くその黨類を退けたけれども、明
室の傾頽は到底これを維持することはできな
だ、滿洲の兵勢は日に強大さなつて、國內は紛
亂を極めた。

滿洲にては、太祖が崩じて、太宗次ぎ立ち、先
朝鮮を討ち、京城を陷ぬれ、國王李宗を降して
東順の患を絶ち、力を専らにして、ますく、

明の滅亡

一 二 三 四

明の地を侵畧した。國號を清と攻めたのもこの太宗の時である。世祖、次いで立ち、睿親王多爾袞を總督として、征明の大師を起したが、明は、吳三桂に命じて、北邊の防禦に當らしめた。

然るに、この時、流賊の長、李自成は陝西、山西地方を略して、遂に進んで、北京を陥れ、明の毅宗は自殺した。明は、太祖から二百七十七年にして亡んだ。

明の系統は、尙、絶へず三王相次いで立っただれども、只、空名を存するばかりであった。

明將吳三桂は、京師の變を聞き、清に降って、その援兵を乞ふた。世祖は、多示褒をして三桂と共に兵を進めて自成一破らせた。遂に、都を北京に遷して、即位の禮を行ひ、官民をして悉

(記憶筆記)

元明時代の交通状況

元 陸上 交通

清の制度に従はしめた。已にして、諸地方叛賊の餘類も、次第に平定せられて、天下は清の一統治下に屬することになった。

蒙古族が北方から起って、宋金二國を滅した時、その版圖は歐亞二洲に跨って、従って、交通も頻繁になったから、道路を改修して、交通を便にしたのみならず、驛遞を置いて、彼我の交通を通するに至った。これが東洋に驛遞のある所以で、實に元代の大成功であった。

明の孝宗の時、倭るとがる人、ちあすこだがまが喜望峯を廻航して、印度に航したのが、海上交通の始である。

倭るとがる國の皇太子が、自ら、世界發見の大決心を据へて、航海術を奨

(記憶筆記)

明の海上交通

B

勵し始めてから、續々、新陸の發見を見るに至った。爾後倭るとがる人は、ますます進んで、印度の西岸なるところを奪ひ、次でかつかつたを略し、遂には、支那の阿瑪港を占領して、貿易の根據地となし、後柏原天皇の時には、我日本に通商せんと、肥前の平戸へ来たことがある。それから八九十年間、盛に東洋貿易で利益を得た。

(記憶筆記)

いすばにあらんは、ぼるとがる人に劣らぬ航海家であつて、南亞米利加から東印度に来て後に、比律賓の群島を本根としてまはら府を建て、日本の肥前へも貿易に来て、ぼるとがる人と激劣の競争を始めて商權を擴張した。

元明の學藝宗教

學藝

儒 詩 畫 佛 道

學

學校教育を重んじ、京師には、國子監、地方には府州縣學。學問界に於ける大人物、王守仁(陽明)、智行合一の説を唱へた。我國の中江藤樹、熊澤蕃山、大鹽後素等の人々は、皆この陽明學を講じた人である。

宋濂、方孝儒、文を以て鳴り、高啓、袁凱、詩を以て鳴る。

仇英、沈周、董其昌、最も世に著はれた。

宋の世に於ては盛であつたが、元以後になつて、衰微に傾いた。

元代で衰へてゐた道教は、明代になつて見かへすばかり盛になつた。今も、尙、流行してゐる。

(記憶筆記)

宗教

喇嘛教

佛教に屬する一派であつて、西藏地方に偉大の勢力を以てゐる。元の世祖西藏を征伐した時、らま教派の反對を恐れ、世宗自身も、その信者であるやうに装うて、らま教を尊崇した。これに依つて、その勢力大に増加した。その後、黄教、紅教の二部に分れて、紅教は衰微したが、今、支那地方に勢力のあるのは、黄教の方である。

(記憶筆記)

基督教

基督教は、元の版圖が歐亞に跨るやうになつて、兩國の交通漸く密となり、ついで、明の末になつて、名高いまてを、りし、なごいふもの、支那本部に入り込み、神宗皇帝の時、深く宣教師を尊んだが、日本では幕府が嚴禁したから、秘密に、これを傳

清

近世史

清の興起

一仰してゐるものもあつたが、極めて少かつた。

愛親覺羅氏

金の滅後は、女真全く振はなかつたが、明末に至つて、愛親覺羅氏、俄然として起り、ほとあらに移るに及んで、勢強大となり、國を滿洲と號した。

太祖の版圖

北は黒龍江、南は朝鮮に、西は遼河より東は海に及んだ。

清の開國

太祖崩じて、その子の太宗が位に即くに及んで、明の神宗と、朝鮮とが力を合はせて攻めて來た。太宗即ち、この大兵を敗り、明の瀋陽を取つて、都となし、これを盛京と稱へて、國號を立て、清と稱へた。

(記憶筆記)

本部の

太宗已に崩じて、その子世宗位に即き、軍を遣はして明を討たしめ、吳三桂と相戦うて、また勝敗が決しなかつた時に、明の毅宗の計が到つたから、三桂は清に降り、兵を併せて北京に入り李自世を破つて世祖を北京に導いた。福王、及び唐王、相ついで、明の王位に即いで、南方を固守したけれども、皆、失敗して、桂王も廣西にて天子と稱へたが、これまた、失敗に歸した。

(記憶録記)

鄭成功の事業

鄭成功は、日本の平戸で生れ、忠勇兼備の名將であつて、力を明の恢復に凝ぎ、明の王族魯王を奉じて、頻りに、四近を攻略したが、大夏の覆へるのを支へ切れなかつた、兵利あらずして退いて臺灣を守つた。臺灣は、先に、我國人の占領する所となつて、その後、和蘭人の手に歸したが、こゝに至つて、鄭成功、悉く蘭人を逐ひ、自ら根據地とした。翌年、魯王、成功、相つぎで没

したけれども、成功の子、經は、猶、臺灣に據つて清に屈せなかつた。

三

藩

吳三桂 (雲南の地に封ぜらる)。
尚可喜 (廣東の地に封ぜらる)。
耿繼茂 (福建の地に封ぜらる)。

明の降將

三藩とは、三國の藩屏の義である。封内の財政、軍政の全權を握らしめて、明の遺民を鎮撫させた。

吳三桂、その封地に據つて反し、自ら天下都招討兵馬大元帥と稱へて、諸洲を攻略した。

耿精忠も、亦、兵を擧げて反し、臺灣の鄭經と相應じて、廣東の尚可喜の子、之信も、亦、遙に三桂に通じた。

由來

二

(記憶録記)

三藩の亂

三
こゝに於て漢人の不平を抱けるもの
(即ち清朝の辨髮令を喜ぶるもの)、
所在これに響應して、江南一帯、皆、
その有さなつた。その勢、一時は甚
だ盛であつた。

清兵、諸道から進入で、これが征討
に盡力したから、精忠、之信は清に
降り、三桂は病んで歿し、その勢の
衰ふるに乗じて、清の精兵、進んで三
桂の餘黨を討ち、これを平げた。九
年に亘つ大亂も、こゝに全く平定し
た。

結果

鄭成功、魯王を助けて、明の回復を謀つたが、
志を遂げないで死でしまひ、その子鄭經、尙、
臺灣に據つて隙を覗がつてゐたとき、恰も、三

(記憶筆記)

聖祖の功業

臺灣の平定

藩の亂があつたから、機乘すべしと思ひ、耿精
忠に通じ、相提携して、回復策を講じたけれど
も、三藩は清廷の破る處となり、清の威勢、ま
すく盛となつた。時に、鄭經が死んで、その
子の克映が代つて、遂に、清軍に敵することが
できないで、清に降つて、臺灣はこゝに平定し
た。

ねるちん
すくの條

清朝が、南方に事のあつたに乗じて、露人侵略
の勢、ますます迫つて來た。聖宗、これを患
ひ、先、あいぐん城を築いて、これに備へ、次
で使をあるばじんにやつて、露人に退去を諭し
た。けれども、守將「とぼるじん」命に應せなかつ
たから、軍を出してこれをねるちんすくに逐
ひ退けた。然るに、幾もなく、露兵、又、ある
ばじんを回復した。聖祖は書を露廷に送つて、
邊境を議定せんことを求めた。露帝はてつ一
世、これに應じたから、兩國の使臣ねるちんす

(記憶筆記)

くに相會し、外興安嶺、及び、あるぐん河を以て、國境を定めた。聖宗は、新に、黒龍江沿岸に屯田兵を置いて、この方面の守備に充てた。

(記述筆記)

蒙古及び西域地方

天山北路

遼東 東北蒙古
漠南蒙古…又は、中央蒙古
西北蒙古

ウエラ 五刺

伊犁地方
どるど部
てるべ部
ほしよ部…青海附近

天山南路

かしゆがる
ひまらや
西藏

らあち、じゆんがるの會長に、がるたんといふ英雄があつて、西藏を征服し、遂に天山南路一帯を併有し、更に進んで中央蒙古に攻め入った時、こゝに清と衝突を起し、戦ふて敗死した。

がるたんの姪、ちねわん、あらぶたんは清と通じて、がるたんの襲ひ、これを殺して五刺を領有し、又、西藏を併呑せんとして清軍と衝突して敗れた。

ちねわん、あらぶたんは敗れて伊犁に據つてゐたが、聖祖の死を聞いて、青海の民を煽動して、清に反抗した。ちねわん、あらぶたん死んでその子がるたん、ちねりんくは、父の志を嗣ぎ、依然として清に反抗しつゝあつた。

天山北路

高宗は、あむるさなを伐ちて、これを滅し、全く、天山、北路の地を占領した。

(記述筆記)

高宗の偉業

西方経略

天山南路

汗の二十子ふらにど、れーちーちぬんは、共に、あむさなの反に興してなほも、くーちゆ城に據りて、清朝に反抗した。高宗また、これを伐ちて、全くこれを併呑した。

西域

こーかんと、あのがんの諸國も、また、來貢して、國威は燕嶺以西に及んだ。

一、

高宗は、びるまを征して、これを併呑した。

二、

次いで、しゆむを朝貢せしめた。

三、

安南の内亂に乗じて、又、これを朝貢せしめた。

南方経略

四、

高宗は、また、ひまらや山南の蠻部を討つるかを伐ち、その國都かとまんとを陥れて、これを降した。これは、實に、高宗最後の外征であった。

皇

帝内機處閣

六部

- 吏部 内外文官の任免を司る
- 戸部 財政を司る
- 禮部 禮法學政を司る
- 兵部 軍事及び武官の任免を司る
- 刑部 刑法を司る
- 工部 土木經營を司る

長官を尚書、次官を侍郎

總理各國事務衙門……外交を司る。

海軍衙門……海軍を司る。

高宗の偉業

西方経略

天山南路

汗の二十子ふらにど、れーちーちぬんは、共に、あむさなの反に興してなほも、くーちゆ城に據りて、清朝に反抗した。高宗また、これを伐ちて、全くこれを併呑した。

西域

こーかんと、あのがんの諸國も、また、來貢して、國威は燕嶺以西に及んだ。

一、

高宗は、びるまを征して、これを併呑した。

二、

次いで、しゆむを朝貢せしめた。

三、

安南の内亂に乗じて、又、これを朝貢せしめた。

南方経略

四、

高宗は、また、ひまらや山南の蠻部を討つるかを伐ち、その國都かとまんとを陥れて、これを降した。これは、實に、高宗最後の外征であった。

八衙門

前部の六
部交、の
海外軍、
二部、の
加ふ、

【註】理藩院は、蒙古、天山路等の外藩を司る。

理藩院
長官を
尙書と
いふ。
定邊左副將軍
四寧辦事大臣
駐藏辦事大臣
盟長 札薩兒

.....盟長 札薩兒

吉林將軍 (滿洲吉林を鎮す)
黑龍江將軍 (滿洲黑龍江を鎮す)
奉天府尹 (滿洲全部を司り、吉林、黑龍江、
二將軍を監す。)

總督 (地方長官)

提督 (武事を司る)

布政使 (財政を司る)

巡撫 (民政を司る)

按察使 (刑獄を司る)

(記憶筆記)

支那本部

直隸 山東 山西 河南 浙江 安徽 江西 福建 廣東 廣西 湖北 湖南 陝西

又、支那本部を分けて、十八省とし、省の下に府、府の下に州、及び縣がある。滿洲のみは、支那本部と、事情及び風俗が違ふから、少し様子がはつてゐる。

(府には知府、州に知州、縣に知縣がある。)

(記憶筆記)

滿洲の東三省
 盛京 吉林 黑龍江
 雲南 貴州 四川 甘肅

將軍、府尹等があつて、これを治める。

陸軍々備

京城守備
 支那本部守備
 新疆守備
 蒙古守備
 青海守備
 滿洲守備
 關白特守備

(記憶筆記)

兵

制

兵種

海軍々備

北洋水師…(渤海沿岸を守る)
 南洋水師…(江蘇浙江沿岸を守る)
 福建水師…(福建沿岸を守る)
 廣東水師…(廣東沿岸を守る)
 長江水師…(長江一帯の警備に充てる)

八旗の兵
 (皇帝の親軍)

鎮黃 正黃 正白 鎮白 正紅 鎮紅 正藍 ○藍

(滿洲、蒙古、漢人併せて二十四旗。)

綠 旗…漢人の常備軍
 勇 兵…地方の義勇兵

(記憶筆記)

學

【註】海軍々備は、近時の發達であつて、この中に日清戦争のとき亡
されたものもある。

(記憶筆記)

進學術の
學術は、宋明時代の理學は衰へて、漢唐時代の
餘風を存し、事實に基いて、實用に適せしむべ
き風に變じて來た。この學を唱へ出したもの
は、顧炎武、次に、閻若璩、毛奇齡などの學者、
續出して、ますますこれを明にした。

術

名士の出
文人としては、侯方域、魏禧、汪琬、方苞、朱
彝尊、等の名士が輩出した。
詩人としては、錢謙益、吳偉業、王士禛、查慎
行等の名士が輩出した。

學術の發達
清代には、地理學、言語學、考古學、史學、大
に發達した。

康熙乾隆時
代の大著述時

- 佩文韻府
- 淵鑑類函
- 康熙字典
- 大清會典
- 大清一統志
- 十八省通志
- 四庫全書提要
- 圖書集成

これらの浩瀚なる書籍は、陸續發行せられ他の時代に見るべからざる大著を殘
した。その他、元明以來、東傳せる、西洋の算術も、又、清代にて發達し、梅
文鼎の如き大家も出た。又、小説に於ては、文章の妙、古今獨歩の稱ある、金
聖嘆の如き名家も出た。

- 佛道
- 喇嘛教
- 西藏、蒙古、滿洲に行はれてゐる。
- 回教
- 天山南路から、甘肅、陝西附近に行はれてゐる。

(記憶筆記)

宗

教

基督教

明末から清初に行はれ、聖祖の力によりて、益々盛になり、世宗の禁止以來、一旦挫折したけれども、後、また、漸く流行の運に向うた。

白蓮教：高世以來、殆ど、その跡を絶った。

(記憶筆記)

蘭

人

蘭人、明末に至って、初めて東洋に來た。先來の葡、西、兩國人と競争して、これに克ち、次第に成功して、臺灣を占領し、盛に東洋貿易を營んだ。

西歐人の東漸競争

英

人

英人も、蘭人と相前後して、印度に入り、東印度會社に起して、専ら印度の商權を擴張した。まどらすを根據地として、盛に佛人と競争した。

佛

人

佛人も、英人と前後して印度に入り、同じく東印度會社を起し、英人と印度の占權を争うた。

英佛衝突

- 一、
- 二、
- 三、
- 四、

印度には、先來の葡蘭二國退きて、英佛二國の對抗競争となった。

莫臥兒帝國の衰亂に乗じて、互に印度を蠶食せやうと思つた。

初は、佛人、英人の根據地を攻めて陥れ、一時英人を壓倒した。

その後、英國の勇將(東印度會書記出身くらいふ)、佛人及び印度兵の聯合軍を大破したから、印度の實權は、遂に、英人の掌裡に歸した。

原

因

あくばる帝の後、二代を経て、あうらんぐせふに至って、南印度を征定したけれども、婆羅門教徒を虐待した爲に、その死後、國內大に亂れ、四分五裂して、帝權全く地に落ち、外は連年べるしあの侵界を蒙り、内は諸侯が各地に獨立しても、これを制することが出来なかつた。

(記憶筆記)

莫臥兒帝國滅亡

英國は、次で、^{マレー}びるまをも併せ、又、馬來半島の諸國をも併せて、海峽殖民地を爲した。

結果

英人くらゐ及びへすちんを以下の總督、已に衰亂せる莫臥兒帝國を蠶食して、遂には、印度總督となり、莫臥兒皇帝を廢して、同帝國を滅し、英國女皇、遂に、印度女皇の位をも兼ねるやうになった。

(記憶筆記)

原因

英人は、印度を滅した手段を以て、支那にも應用せんと思ひ、阿片を支那に輸入することが、實に夥しいものであった。この阿片は人身を害することが甚だしいから、宣宗は、これを憂へ、林則徐を擧げて、兩廣總督となり、阿片の輸入を嚴禁させた。則徐は、英商の阿片箱二万餘個を收めて燒棄し、尙、阿片を喫するものは、死刑に處すべきことを命じた。

阿片戦争

事實

英國政府は、怒って、軍艦を遣はし、江りねつとなごをして、清國を伐たせた。英兵は、まづ、廣東、定海、鎮海、寧波、吳淞、等を封鎖し、鎮江、舟島を降して、渤海に侵入した。

清軍は連敗して、その敵すべからざるを知り、泣々、左の條件を承諾して、一時和を結んだ。

結果

南京條約

- (一) 香港を割讓すること。
- (二) 上海、寧波、福州、廈門、廣東の五港を開放すること。
- (三) 償金として、金二千六百万兩を支出すること。

(記憶筆記)

長髮賊の亂

原因

阿片戦争の爲、清政府の無能力なることを認め、洪秀全といふもの亂を起し、基督教を利用して、愚民を煽動した。この兵は、時代の風俗を残して、髪を長く蓄へてゐたから、長髮賊といふのである。國號を建て、太平天國と名づけ、勢、甚だ猖獗であつた。

結果

宣宗殂し、文宗立つに當つて、長髮賊の勢、ますます、鋭く、官軍は連敗の姿であつた。この時、曾國藩、首として義勇兵を募りて賊を討ち、李鴻章、左宗棠、等、相次で賊を討ち、賊勢稍々不振となつた時に、外には英國商船と支那官吏との紛議が起つて、清國がその方に力を盡してゐる間に、賊は、ますます勢力を擴張した。その後、外難の紛議も纏つたから、心を專にして、賊の討伐に當つた。さすが、猛勢であつた長髮賊も、十五年間の大亂を経て、穆宗の即位後三年に、漸く平定した。

(記憶筆記)

英佛の北清侵伐

原因

一、南京條約以後、清廷は、實施を遅延して、英人の不平を招いて居る。折柄、廣東の官吏、英船のあつち一號に入つて、英人の國旗を辱しめた。
二、佛の宣教師が、清人に殺された。

事實

英佛二國は、大に怒つて遂に連合してこれを攻めた。

結果

清は、この時、内亂の最中にて、到底、これを防ぐことができなかったから、遂に、和を乞うて、償金一千八百萬兩を送り、牛莊、登州、九江、漢口の諸港を開きて、この事件は、局を結んだ。

露國は、大抵、蒙古人に臣事してゐたが、欽察汗國の勢、衰へたるに乗じて、遂に獨立して、

(記憶筆記)

露清の關係

露の獨立
と東侵の
始

蒙古の羈絆をのがれてからは、追ひ／＼盛になつて、ちやうど山東から西比利亞に侵入して來た。これが露人東侵の始である。清の始の頃は、黒龍江の上に城を築いて、遂に、滿洲の北部にまで侵入して來た。

あいつの
條約

露清間には、**ねるぢんぐす**條約があつてから、一時は、平和に歸したものの、はとらす一世の時、清國の内亂に乗じて、新に國境を協定すべきを清廷に逼つたのである。その時、清國は外寇内亂一時に起つた時であるから、後日の憂を慮るの遠なく、黒龍江以北の地を割いて、露國の要求に應じた、これが有名なる**アムール**條約といふ。

露の東方
經營

英佛二國が北京に攻め入つた時にも、露國が仲裁をした報酬を求めに來て、烏蘇江東の地を取つたから、露國の境は、直に朝鮮に臨むことゝなつた。

露國の南略

露の中亞
侵略

露は、東方侵略と並び進んで、中央亞細亞をも侵略した。東方經營に於ては、比較的容易に奏功したけれども、中亞の方面は、政府の兵力を要するところが多くて、多大の年月と人命を費した。

露の伊犁
占領

西北方面にても、露は次第に、清と境を接するやうになつた。伊犁地方に回教の亂あるに乗じて、露は領土の邊境平和を名として、伊犁を占領してまつた。清の左宗棠、この亂を平定し、露に對し、伊犁の返還を要求したが、露が聞かなかったから、清から九百万兩にふるを支辨して、漸く和好の局を結んだ。

英露の
衝突

露は、又、南進して、印度方面に出でやうとしたが、英國が、無論、これを喜ばない。どこまでも、露國に反對して、遂に、英露兩國から委

員を派して、境界條約を定めた。これが爲、露が南下の宿志は、英國の爲に妨げられて、止まった。

(記憶筆記)

越南の建國

安南は、佛國の宣教師が澤山に來住して居った。王族の子孫、阮福映といふもの、同族阮文惠を逐うて自立しやうとした時に、宣教師の救ひを得て、遂に、その目的を遂行することができた。國號を越南といふた。

佛國の柴棍占領

福映が、佛人の助を得た時に、成功すれば地を割いて、通商を許さうとの約を結びながら、成功しても、約を履行せなんだから、佛人は大に怒って、柴棍を攻めて、これを略し、南方交趾の地を割譲せしめた。

その後佛國は、かんぼちを保護國としたから、越南人は大に怒って、佛國に反抗した。清

南亞の形勢

佛國と安南の戦争

の長髮賊の餘黨、劉永福の救を得て、佛軍と大に戦つた。永福も、中々、よく戦ふたけれども、遂に、佛國に敵することができないで、東京地方を佛國に割いて、又、その保護國となつて和を結んだ。

清佛戦争

越南は、元來清の封冊を受けてゐた國であるのに、又、佛國の保護國となつたから、清はごまかでも承知しない、そこで大兵を擧げて劉永福を助けて、佛人を攻撃した。佛國の海軍は、先、福建艦隊を全滅し、且、臺灣諸港を封鎖したけれども、清將左宗棠よく防ぎ、佛の將軍も死んだ折柄、佛もこの上あまり戦を好まなかつたから、こゝに兩國の和議整ひ、清は安南を佛の保護の下に置き、佛は清から、償金を取らないうことにして、平和を結んだ。

(記憶筆記)

日韓條約承認

鎮國斷行

韓國は、神功皇后、聖德太子の征伐があつたけれども、已に多くの年數を経たことであるから、彼の國人は、別に、日本に對して、敵意を挟む様子もなかつたが、(維新前までは我國將軍の更代毎に通聘して居った。)四十年前、全王の即位のとき、幼帝(李熙、即位の年十二歳)の父、大院君攝政となつて、頗る、外國人を憎み、通商開國を促した、佛、米の諸艦を撃滅して、堅く鎮國の主義を斷行した。

日本の開國催進

この時、我國は、善隣平和の國是を定め、清韓二隣邦にも向つて、開國通商を促した。朝鮮では、保守的頑固の大院君、少しも、これに應ぜなかつた。のみならず、我軍艦を仁川灣内に砲撃した。我國からは、黒田清隆を遣はして、その罪を問ひ、朝鮮と談判せしめ、左の條約を締結した。

一、朝鮮は獨立國であつて、日本と對等の交際をなすこと。

二、釜山、仁川、元山の三港を開いて、日本と通商條約をなすこと。

列國の承認の以上は、丁度、明治九年のことであつて、日本は、卒先して、朝鮮の獨立を認め、次いで、英、米、露、佛、獨も、亦、これを承認した。

朝鮮王、漸く長じて、大院君は、政を返還したが、王妃閔氏の一族、政權を專にして、我儘に振舞つた。大院君は不平に堪へないから、遂に、亂兵を煽動して、閔氏を討ち、且、我公使館をも襲撃した。

原因

清國は朝鮮の内亂鎮撫に託して、大兵を派し、且、朝鮮が、その外藩たることを主張して、我が勸告を却け、反つて、我國が天津條約によつて、出兵してゐるのを、撤兵せよと我に求めた。

朝鮮の内訌

日清戦争

事實

我國は清國が天津條約を破つたのを憤り、遂に、宣戰を公布し、海陸兩方面から、清國を討つた。

陸軍は、まづ、牙山、平壤に據つてゐる清兵を撃退し別軍と共に、進んで、遼東半島を略し、海軍は、清國の北洋艦隊を黄海に破り、追うてこれを威海衛に殲し、海陸力を協せて、將に北京を衝かんとした。

清國は、連戦連敗、遂に和を請ひ、李鴻章を派し、我が伊藤博文と下關に會して、所謂下關條約を締結して、和を講じた。

結果

下關條約

- 一、清國は朝鮮の獨立國たるを承認す。
- 二、償金二億兩を出し、遼東半島及び臺灣、澎湖島を讓與す。

三、沙市、重慶、蘇州、杭州を開放す。

その後、露、獨、佛三國の抗議を容れて、遼東半島を還附し、三千万兩の代償を得た。

朝鮮獨立の

國號を大韓と改む

朝鮮は、下關條約の結果、清國への貢獻、典禮を廢し、その獨立を國內に告げ、獨立祭日を定め、(明治二十八年)、國號を大韓と改め(明治三十年)、我國も、亦、銳意、これが扶植に盡力した。

ところが、東亞の經營に熱心なる露國は我國の勢力が、朝鮮に加はることに異議を唱へ、遂に、日露協商を結び、韓國内に於ける我國の商工業

の優勝権を承認すると共に、韓国の主権及び獨立を確實にすることを議定した。(明治三十一年)。

(記憶録)

清國は、戦敗によって、多大の損害を蒙ったのみならず、その弱勢を觀破した諸外國から、種々の強請を受けた。

清國の困難

佛 遼東還附に干渉した報酬として、廣東、廣西、雲南の鑛山採掘権を得、ついで廣洲港を借り受けた。

列強の要港占領

露 滿洲を貫いて、西伯利亞鐵道を敷設することの許を受け、ついで、旅順口、大連灣を借り受けた。

清國の改革

獨 宣教師の殺害されたのを口實として、九十九年間膠州灣を占領する許可を得た。

英 威海衛を租借して、列國との權衡を保った。

日清戦争の失敗と、諸外國の強迫とは、一部の清人を刺戟して、變法自強の氣運を起させた。

廣東の儒者康有爲の如きは、屢々、その改革意見を上疏したところから、光緒帝は、これを登用して、共に、種々、急激な改革を計畫した。

(記憶録)

日清戦争の歴史

義和團の乱

清廷が耶蘇教を公許してから、この方、耶蘇教士の支那に來りて、布教するものが多かつた。ところが、彼等は、往々支那人を侮辱し、しつこのみならず。耶蘇教に轉じた支那人等は、耶蘇教士の保護を頼んで、不法の行爲が多かつたから、支那人は、一般に耶蘇教を厭忌したが、殊に日清戦争後、諸外國が支那の各地を占領してから、益々外人排斥の氣焰を高め、遂に、西教撲滅、外人排斥を旨とした義和團と稱する暴徒が、山東省に起つた。清廷は、寧ろ、これを保護する形迹があつたから、義和團の勢力は、日に加はつて來て、遂に、北京に入り、清軍と協力して、列國の公使館を攻撃した。

三、
迫害を試み、改革黨は、多く殺戮され、西太后が國政を執られることになつた。

(記憶筆記)

聯合軍の進撃

そこで、日、英、米、露、佛、獨等の聯合軍は、公使館を救うて、北京を占領したところが、光緒帝と西太后以下、一時西安府に出奔した。

列國と清との構和

ところが、さすがの清廷も、いよくたまたまいやうになつて來て、遂に、和を請ひ、列國の使臣は、四億五千万兩の賠償金、暴學主謀者の嚴刑等を命じて、これを許可した。この騒亂に際し、露國は滿洲を占領してゐたが、平和恢復の日には、必ず撤兵すべきことを列國に通牒した。

日英同盟

露國は、已に、滿洲から撤兵すべきことを約束したにもかゝらず、陰に、清廷を脅迫して、東亞の平和に害ある新條約を締結せんと力めたがこの間、日英兩國の利害が、相一致したものだから、兩國は、清韓保全と、東亞の平和とを目

(記憶筆記)

日露の戦

的として、同盟を締結した。そこで、露國は、遂に十八ヶ月間に、必ず、撤兵を實行するを宣言した。

けれども、初め、東亞の侵略を目的としてゐる露國は、この宣言を實行せないのである。更に、日露協商に背き、韓國の北境を威迫して、その主權を蹂躪するに至つた。そこで、我國は、露國に對して、支離的交渉を重ねることが半歳に及んだけれども、露國は、全く、これを無視し、益々、東亞の軍備を擴張して、我國を壓服せんとする形勢があつたから、我國は自國の安全と東亞の平和のため、遂に、宣戰を公布するに至つた。實に、明治三十七年二月。

(記憶筆記)

言文一致
東洋歴史表解
なほり

附表

東洋史畧年表

皇紀	西紀	摘要
前一八〇〇頃	前二四六〇頃	黃帝支那を統一す。
一四四〇頃	二二〇〇頃	舜の禪を受けて禹帝位に即く。
九〇〇頃	一五六〇頃	夏亡び殷興る。
三九〇頃	一〇五〇頃	殷亡び周興る。古朝鮮の建國。
三四〇頃	一〇〇〇頃	ありあらん人印度に小王國を建つ。
一一一	七七一	周室東遷。
九三	七五三	此年より以下を春秋といふ。
一六	六四五	齊管仲死す。
三八頃	五六四頃	釋迦印度に生る。
一一〇	五五一	孔子魯に生る。
一一五	五四六	宋に於て諸侯平和の約をなす。
一八八	四七三	越王勾踐吳を滅ぼす。
二五八	四〇三	韓、魏、趙三氏諸侯となる。以下戰國と云ふ。

三三八
三三四
三五一
三七七
四四〇
四四七
四五九
四六七
四八一
五〇七
五二一
五三五
五四二
五五〇
五五三
五七四
六〇一

三三三
三三七
三一〇
二八四
二三一
二二四
二二〇
二〇二
一九四
一八〇
一五四
一四〇
一二六
一一九
一一一
一〇八
八七
六〇

蘇秦、合従の策をなす。
 苻苻、連衡の策をなす。
 秦始皇、天下を統一す。
 秦始皇崩じ、群雄蜂起す。
 漢高祖、項羽を滅ぼして帝位に即く。
 古朝鮮亡ぶ。
 漢文帝即位す。
 吳楚七國の亂平ぐ。
 漢武帝即位す。
 張騫、西域より歸る。
 衛青、霍去病等大に匈奴を破る。
 漢武帝、南越を平げ、九郡を置く。
 漢武帝朝鮮を平げ、四郡を置く。
 漢武帝崩す。これより霍光攝政す。
 漢宣帝、西域に都護府を置く。

六〇四
六一〇
六二四
六四三
六六八
六八五
七二七
七三三
七五一
七五七
八二六
八四四
八六四
八六八
八七四
八八〇
八八二

五七
五一
三七
一八
二五
六七
七三
九一
九七
一六六
一八四
二〇七
二〇〇
二〇八
二一四
二二〇
二二二

朴赫居正、新羅を建つ。
 匈奴、漢に内属す。
 高朱蒙、高句麗を建つ。
 温祚、百濟を建つ。
 王莽帝位を篡し、國を新と號す。
 後漢光武帝即位す。
 洛陽に白馬寺を建つ。
 後漢明帝大に匈奴を破る。
 班超、西域都護となり、諸國を威服す。
 甘英、大秦國に使用して達せず。
 清節の士獄に下さる。黨錮の禍。
 黄巾賊起る。
 諸葛亮、劉備に仕ふ。
 神功皇后、三韓征伐。
 曹操、江北の地を領す。赤壁の戦あり。
 劉備、蜀に入り、成都に都す。
 曹丕、漢室を篡奪す。
 劉備崩す。

八九四	紀
九二二	三
九二五	五
九四〇	〇
九六四	四
九六六	六
九七六	六
九八九	九
一〇〇七	七
一〇一一	一
一〇三〇	〇
一〇四三	三
一〇四六	六
一〇八〇	〇
一〇八四	四
一一〇七	七
一一二一	一

皇

四

紀

諸葛亮、五丈原の陣中に薨す。
蜀滅ぶ。
司馬炎、魏を篡し、晋室を興す。
吳滅ぶ。
匈奴の劉淵、國を漢と號し、平陽に都す。
八王の亂平ぐ。
晋滅ぶ。翌年東晋元帝立つ。
石勒、前趙を滅ぼす。
東晋の桓温、蜀を滅ぼす。
慕容儼、後趙を滅ぼす。符健自立す。
秦符堅、王猛を遣りて燕を滅ぼす。
肥水の戰あり。以後十二國興亡。
拓跋珪、平城に都して國を魏と號す。
東晋亡ぶ。宋武帝立つ。以下南北朝といふ。
後魏太武帝即位す。
後魏太武帝、柔然を破る。
後魏太武帝、大に宋軍を破る。

一一三一	一
一一三九	九
一一六二	二
一一九五	五
一一〇九	九
一一〇九	九
一一二〇	〇
一一二〇	〇
一一二五	五
一一二七	七
同	年
一一三〇	〇
一一三七	七
一一四一	一
一一四八	八
一一六四	四
一一六七	七
一二七一	七
一二七八	八
一二八七	七

四七一	一
四七九	九
五〇二	二
五三五	三
五四九	九
五五〇	〇
五五五	五
五九七	七
同	年
五七〇	〇
五七七	七
五八一	一
五八八	八
六〇四	四
六〇七	七
六一一	一
六一八	八
六二七	七

後魏孝文帝即位す。
宋滅び。齊太祖立つ。
齊滅び。梁武帝立つ。
後魏東西に分る。
梁武帝、侯景に幽せられて崩す。
東魏亡ぶ。北齊文宣帝立つ。
突厥の木杆可汗、柔然を破りて獨立す。
梁亡ぶ。陳武帝立つ。
西魏亡ぶ。北那の日本府を陷る。
亞拉北亞にもはめど生る。
北周武、北齊を滅ぼす。
北周亡ぶ。隋文帝立つ。
隋文帝、隋を滅ぼし天下を統一す。
隋煬帝、父文帝を弑して位に登る。
日本より遣隋使を送る。
隋煬帝、高麗を伐ちて敗れ歸る。
唐高祖即位。煬帝臣下に弑せらる。
唐太宗即位。年號貞觀。

皇紀

一二九〇
一三〇四
一三〇九
一三二〇
一三二八
一三四〇
一三五〇
一三七二
一四一五
一四二三
一四六六
一五〇七
一五四〇
一五六七
一五七六
一五七九
一五八三

西紀

六三〇
六四四
六四九
六六〇
六六八
六八〇
六九〇
七一二
七五五
七六三
八〇六
八四七
八八〇
九〇七
九一六
九一九
九二三

摘要

唐太宗、東突厥を滅ぼす。
唐太宗、高麗を征す。
唐太宗崩じ高宗即位す。
唐高宗、百濟を滅ぼす。
唐高宗、高麗を滅ぼす。安東都護府を置く。
唐高宗、西突厥を滅ぼす。
則天武后國號を周と改む。
唐玄宗即位す。年號開元。
安祿山反す。後九年にして平ぐ。
吐蕃入寇して長安を陷る。
唐憲宗即位す。勉めて藩鎮を抑ゆ。
唐宣宗即位す。
黃巢、長安を陷る。
朱全忠、唐を篡す。之を後梁太祖といふ。
契丹の太祖、初めて帝と稱す。
王建、高麗を建て松嶽に都す。
後梁滅ぶ。後唐莊宗即位す。

一五八七
一五九六
一六〇六
一六〇七
一六一一
一六一九
一六二〇
一六三六
一六四二
一六四四
一六六八
一七一五
一七二七
一七四六
一七五五
一七八二
一七八七

九二七
九三六
九四六
九四七
九五九
九六〇
九七六
九八二
一〇〇四
一〇三八
一〇五五
一〇六七
一〇八六
一一一五
一一二二
一一二七

契丹太祖、渤海を滅ぼす。
後唐滅ぶ。後晋高祖立。
契丹、後晋を滅ぼし。國を遼と號す。
後漢高祖立つ。
後漢滅ぶ。後周太祖立つ。
後周世宗崩す。
宋太祖即位す。趙普相たり。
宋太祖崩じ太宗即位す。
遼の聖宗即位す。遼の最盛期。
壇淵の後。宋遼和を結ぶ。
李元昊、大夏皇帝と稱す。
遼道宗即位し、國勢漸く衰ふ。
宋神宗即位す。漸く王安石を用ゆ。
宋哲宗即位。司馬光相となり新法を止む。
金太祖、初めて帝と稱す。
金、宋合して遼を伐つ。後三年遼滅ぶ。
金軍汗を陷る。宋滅ぶ。
南宋高宗立つ。

皇紀

一七九五
一八〇一
一八一三
一八二三
一八六一
一八六六
一八六八
一八六九
一八七〇
一八七五
一八七八頃
一八八〇
一八八三
一八八四
一八八七

西紀

一一三五
一一四一
一一五三
一一六三
一一〇一
一一〇六
一一〇八
一一〇九
一一一〇
一一一五
一一一八頃
一一二〇
一一二三
一一二四
一一二七

摘

要

南宋高宗、臨安に都す。
金、南宋相和し、境界を定む。兵飛殺さる。
金主亮、燕京に遷都す。
南宋孝宗即位。後金世宗と相和す。
屈出律、西遼を滅ぼす。
蒙古、鐵木眞、成吉思汗と稱す。
印度奴隸朝起る。
宋、韓侂胄を斬りて金と和す。
蒙古、西夏を降す。
陸遊卒す。
この朝、ほらすむ朝に滅ぼさる。
成吉思汗、屈出律を滅す。
成吉思汗、ほらすむを滅す。
蒙古の太師木華黎卒す。
成吉思汗東歸す。
成吉思汗の軍阿羅思に侵入す。
成吉思汗西夏を滅ぼす。

一八八七
一八九四
一八九六
一九〇一
一九〇一
一九〇四
一九〇五
一九一三
一九一四
一九一七
一九一八
一九二〇
一九二八
一九二九
一九三一
一九三四
一九三四

一一二七
一一三四
一一三六
一一四一
一一四一
一一四三
一一四五
一一五三
一一五三
一一五四
一一五七
一一五八
一一五八
一一六〇
一一六八
一一六九
一一七一
一一七四
一一七四

成吉思汗死す。

蒙古、南宋と合して金を滅す。
拔都西征の途に上る。
高麗再び蒙古に降る。
リトビの役。
蒙古の耶律楚材卒す。
羅馬の使者蒙古に通ず。
蒙古、大理を滅ぼし、吐蕃を降す。
旭烈兀、波新征伐の途に上る。
元好問卒す。
交趾蒙古に降る。
はがだーどのありはす朝。旭烈兀に滅ぼさる。
元の世祖、忽必烈即位す。
蒙古、高麗を外藩とす。
拔都反して大汗と稱す。
忽必烈國號を建て、元といふ。
元軍大舉して南宋を侵す。
元兵、日本に入寇して敗る。

一九三五	一三二七五
一九三六	一三二七六
一九三九	一三二七九
一九四一頃	一三二八一頃
一九四三	一三二八三
一九四四	一三二八四
一九四七	一三二八八
一九五〇	一三二九〇
一九五二	一三二九二
一九五四	一三二九四
一九五九	一三二九九
一九六三	一三三〇三
一九六八	一三三〇八
一九七二	一三三一二
一九七三	一三三一三
一九九三	一三三三三

紀 西 紀

伊太利人ころとぼしる元に来り仕ふ。

南宋亡ぶ。

南宋の遺族崖山に盡く。

元兵、日本に入寇して大敗す。

緬甸、元に降る。

元、大越を降し、占城を征す。

ねつとまん土耳其起る。

印度の奴隸朝亡び、さる朝代る。

元、瓜哇を征す。

元世祖崩す。

耶蘇教徒、寺院を大都に建つ。

元、西南蠻を討平す。

元海都の窩淵台汗國を滅す。

鐵木迭兒、元の政を擅にす。

欽察汗月即別に即位す。

帖木兒生る。

伯顔、元の政を擅にす。

二〇〇四	一三四四
二〇〇八	一三四八
二〇一〇	一三五〇
二〇一〇	一三五〇
二〇一五	一三五五
二〇二八	一三六八
二〇二九	一三六九
二〇三六	一三七六
二〇四〇	一三八〇
二〇四一	一三八一
二〇五〇	一三九〇
二〇五二	一三九二
二〇五九	一三九九
二〇五九頃	一三九九頃
二〇六一	一四〇一
二〇六二	一四〇二
二〇六二	一四〇二
二〇六二	一四〇二

哈麻、元の政を擅にす。

方國珍、兵を起して元に叛す。

暹羅の建國。

倭寇起る。

朱元璋兵を起す。

順帝、舉族蒙古に奔り元亡ぶ。

帖木兒中亞細を平定しさまるかんとに都す。

とくたむし、欽察汗となる。

宋濂卒す。

明支那を一統す。

帖木兒、欽察を征定す。

高麗亡ひ朝鮮代る。季成桂、王位に即く。

帖木兒、印度に侵入す。

靖難の師起る。

足利義滿、明に通聘す。

燕王棣篡立す。

まんごらの戦。

元の遺族、蒙古に在りて國號を韃靼と改む。

二〇六五	一四〇五	帖木兒死す。
二〇六五	一四〇五	明の官者鄭和、南海諸國を巡航す。
二〇六六	一四〇六	明、交趾を降す。
二〇六九	一四〇九	明、暹羅を降す。
二〇七四	一四一四	明、瓦刺を降す。
二〇七四	一四一四	印度のらむらつ朝亡び、さうと朝興る。
二〇七七	一四一七	宗喀巴没す。
二〇九一	一四三一	大越、明の外藩となる。
二一〇九	一四四九	土木の變あり、帝捕はる。
二一一〇	一四五〇	印度ろし朝起る。
二一一七	一四五七	宦者の専横始まる。
二一三〇	一四七〇	暹羅の達延汗立つ。
二一四〇	一四八〇	あすこー大公いあん三世獨立す。
二一五三	一四九三	孟養、緬甸を侵す。
二一五八	一四九八	葡人らあすこた、がま印度に達す。
二一六〇	一五〇〇	べはら汗、中亞細亞を領す。
二一六一	一五〇一	達延可汗、明を侵す。

皇紀

西紀

捕

要

二二六二	一五〇二	波斯にさふい朝興る。
二二七〇	一五一〇	葡人、印度のこあを占領す。
二二七〇	一五一〇	明の安化王の亂。
二二七四	一五一四	葡人支那に來る。
二二七五	一五一五	ひば汗國建つ。
二二七九頃	一五一九頃	明の寧王叛し、王守仁之を平ぐ。
二二八二	一五二二	明朝大禮の議。
二二八六	一五二六	印度莫臥兒帝國の建設。
二二八九	一五二九	王守仁没す。
二二〇〇	一五四〇	大越兩分す。
二二〇二	一五四二	俺答山西に寇す。
二二〇九	一五四九	葡人日本に來る。
二二一六	一五五六	莫臥兒帝あくばる即位す。
二二二三	一五六三	明、倭寇を撃つ。
二二二三	一五六三	葡人阿媽港を占領す。
二二二四	一五六四	暹羅國明に通す。
二二二五	一五六五	西班牙人北律賓群島を占領す。
二二三〇	一五七〇	暹羅の俺答、明と和す。

皇

紀

西

紀

摺

要

二二四〇	一五八〇
二二四一	一五八一
二二四二	一五八二
二二四三	一五八三
二二四四	一五八四
二二五二	一五九二
二二五三	一五九三
二二五三	一五九三
二二五三	一五九三
二二五四	一五九四
二二五六	一五九六
二二五六	一五九六
二二五六	一五九六
二二五八	一五九八
二二六〇頃	一六〇〇頃
二二六四	一六〇四
二二六五	一六〇五

西班牙人日本に至る。
露西亞、東侵を始む。
葡人澳門を占領す。
さらねりつち明に来る。
滿洲に努爾哈赤興る。
明、緬甸を征す。暹羅獨立す。
日本軍、朝鮮に侵入す。
鄭松、安南を一統す。
日本軍再び朝鮮を討つ。
明、東林黨議起る。
阮漢廣南王と稱す。
和蘭人すまとらに来る。
安南また分裂して大起、廣南の二國となる。
秀吉薨じ征韓軍歸る。
英國人、東印度會社を建つ。
佛國印度商會成る。
ありばる死す。

二二六九	一六〇九
二二七三	一六一三
二二七六	一六一六
二二七九	一六一九
二二八四	一六二四
二二八五	一六二五
二二八七	一六二七
二二九一	一六三一
二二九三	一六三三
二二九五	一六三五
二二九六	一六三六
二二九六	一六三六
二二九七	一六三七
二二九九	一六三九
二二九九	一六三九
二三〇二	一六四二
二三〇四	一六四四

和蘭人日本に来る。
英人日本に来る。
滿洲の努爾哈赤、皇帝と稱す。
蘭人、瓜哇に據る。
蘭人、臺灣に據る。
明の宦官、政權を握る。
滿洲の軍、朝鮮を征す。
李自成、兵を起して明に叛く。
山田長政暹羅に死す。
英人明に来る。
滿洲、蒙古を領す。
滿洲、國號を建て、清といふ。
朝鮮、清に降る。
張獻忠、兵を起して明に叛く。
英人まどらすを建つ。
蘭人、臺灣を領す。
李自成、明を滅ぼして大順皇帝と稱す。

紀西紀

- 二三〇四
- 二三〇五
- 二三〇六
- 二三〇七
- 二三〇八頃
- 二三一九
- 二三二〇
- 二三二一
- 二三二二
- 二三二三
- 二三三三
- 二三三八
- 二三四一
- 二三四二

- 一六四四
- 一六四五
- 一六四六
- 一六四七
- 一六四八頃
- 一六五九
- 一六六〇
- 一六六一
- 一六六二
- 一六六三
- 一六七三
- 一六七八
- 一六八一
- 一六八二

摘要

清の世祖、燕京に即位す。
 明の福王、清に降る。
 清、辮髪の令を下す。
 明の唐王、清に降る。
 李自成亡ぶ。
 鄭成功、明の遺族を奉じて臺灣に據る。
 露人ペーリリンが海峽を探險す。
 莫臥兒帝あららんとせよ即死す。
 清、支那を一統す。
 明の桂王卒す。
 鄭成功、蘭人を逐ふて臺灣を領す。
 鄭成功死す。
 明の遺族全くと亡ぶ。
 三藩 亂起る。
 準噶爾部、天山南路を併す。
 三藩の亂平く。
 順炎武卒す。

- 二三四三
- 二三四五
- 二三四九
- 二三五〇
- 二三五七
- 二三五九
- 二三六四
- 二三八〇
- 二三八〇
- 二三八二
- 二三八四
- 二三八四
- 二三八八
- 二三九五
- 二三九六
- 二四〇五
- 二四一三頃
- 二四一七

- 一六八三
- 一六八五
- 一六八九
- 一六九〇
- 一六九七
- 一六九九
- 一七〇四
- 一七二〇
- 一七二〇
- 一七二二
- 一七二四
- 一七二四
- 一七二八
- 一七三五
- 一七三六
- 一七四四
- 一七五三頃
- 一七五七

鄭克爽降り、臺灣平く。
 英人支那通商の特権を得。
 尼布楚條約成り、露清境界定まる。
 露國、かむちあつかを征略す。
 清噶爾丹を破、外蒙古を取る。
 佛人ほんぢぢりーを建つ。
 閩若據卒す。
 清、威を西藏に振ふ。
 佛人ぢりーぶれー、印度に來る。
 波斯のさふい朝亡ぶ。
 清國天主教を禁す。
 清、西藏青海を領す。
 ぎやくた條約成る。
 清世宗崩じ、高宗嗣ぐ。
 波斯王ぢぢるしあー起る。
 英人くらいぶ、印度に來る。
 ねんぐせや新緬甸國を建つ。
 清、準噶爾部の亂を平く。

皇

二四一七
二四二〇
二四二七
二四二九
二四三四
二四三五
二四四一
二四四六
二四四八
二四五二
二四五四
二四五五
二四六三
二四六四
二四六五
二四六六
二四七三

西

一七五七
一七六〇
一七六七
一七六九
一七七四
一七七五
一七八一
一七八六
一七八八
一七九二
一七九四
一七九五
一八〇三
一八〇四
一八〇五
一八〇六
一八一三

據

要

印度ぶらつしーの役。
清、回部を定め、天山南北路を平ぐ。
緬甸のねんぐせや暹羅を併す。
緬甸王まうんまん即位し、清に朝貢す。
へすちんぐす印度總督となる。
廣南亡ぶ。
暹羅王ふあやちやくり即位し、清に朝貢す。
阮文惠、安南を一統す。
安南、清に朝貢す。
かゝるか部、清に降る。
波斯のかぢゆる朝興る。
清の高宗崩じ、仁宗即位す。
阮福映、安南を統一して、越南を號す。
莫臥兒帝國、英人の保護に歸す。
阿片、支那に傳來す。
露國、樺太、蝦夷を侵す。
露國、波斯より外かふかすを略す。

二四八四
二四八六
二四八八
二四八八
二四九一
二四九一
二四九九
二四九九
二五〇一
二五〇二頃
二五〇五
二五〇九
二五一二
二五一四
二五一五
二五一六
二五二七
二五二八
二五二八

一八二四
一八二六
一八二八
一八二八
一八三一
一八三一
一八三九
一八三九
一八四一
一八四二頃
一八四五
一八四九
一八五二
一八五四
一八五五
一八五六
一八五七
一八五八
一八五八

英、緬甸と戦ふ。
どすと、もはめつと、かふる王となる。
露國、波斯を伐つ。
あふがにすたんの統一。
清、回部の亂を定む。
あふがにすたんと戦争。
阿片戦争。
暹羅、東浦塞を附庸とす。
南京條約成り、香港、英領となる。
米船浦賀に来る。
長髮賊起る。
英國又緬甸と戦ふ。
べるぢすたん、英國の保護國となる。
英國阿富汗と和す。
あろー號事件起る。
印度土兵の大叛亂。
莫臥兒帝國亡び英領となる。
天津、愛理二條約成る。黒龍江北路領に入る。

紀

二五二九	一八五九
二五二〇	一八五〇
二五二〇	一八六〇
二五二二	一八六二
二五二三	一八六三
二五二三	一八六三
二五二四	一八六四
二五二六	一八六六
明治元	一八六八
四	一八七一
六	一八七三
七	一八七四
八	一八七五
九	一八七六
九	一八七六

四

紀

佛國、柴棍を占領す。
 日本開國す。
 英佛聯合軍北京に入る。北京條約成る。
 烏蘇利河東、露領に入る。
 支趾那、佛領となる。
 かむぼちあ、佛國の保護領となる。
 朝鮮王、李熙、即位す。
 長髮賊平定す。
 佛國江華灣を侵す。
 露國、べはら汗國を降す。
 露國、伊犁を占領す。日清條約成る。
 露國、ひば汗國を降す。
 日本、臺灣を征す。
 さがれん島、露領に入る。
 露國、こーかんとを滅す。
 日本、朝鮮と通商條約を結ぶ。
 英國女皇ひくとりあ、印度皇帝と稱す。

要

一四	一八八一
一五	一八八二
一六	一八八三
一七	一八八三
一八	一八八四
一九	一八八四
二〇	一八八五
二一	一八八六
二二	一八八六
二三	一八八七
二四	一八八七
二五	一八八八
二六	一八八八
二七	一八八九
二八	一八九〇
二九	一八九〇
三〇	一八九〇
三一	一八九一
三二	一八九一

清露の伊犁事件定る。
 朝鮮の亂民、日本公使館を焚く。
 越南、佛國の保護領となる。
 東京、佛領となる、清佛戦争起る。
 日清の朝鮮守兵衝突す。
 清佛講和。
 緬甸亡びて英領となる。
 佛國、暹羅よりめこん河東を取る。
 朝鮮東學黨の亂。
 日清、戦争起る。黄海の海戦。
 日清講和。
 三國の干渉。
 臺灣。日本の領土となる。
 英露のばみーる問題落着す。
 馬來半島、英國の保護領となる。
 獨逸の膠州灣租借。
 朝鮮、國號を大韓帝國と改む。
 ふいりびん群島、米國領となる。

皇

紀元	西紀	東紀
三三二	一八九九	
三三三	一八九九	
三三三	一九〇〇	
三三三	一九〇〇	
三三四	一九〇〇	
三三五	一九〇一	
三三六	一九〇二	
三三七	一九〇三	
三三七	一九〇四	
三三八	一九〇四	
三三八	一九〇五	
三三八	一九〇五	
三三八	一九〇五	
三三八	一九〇五	

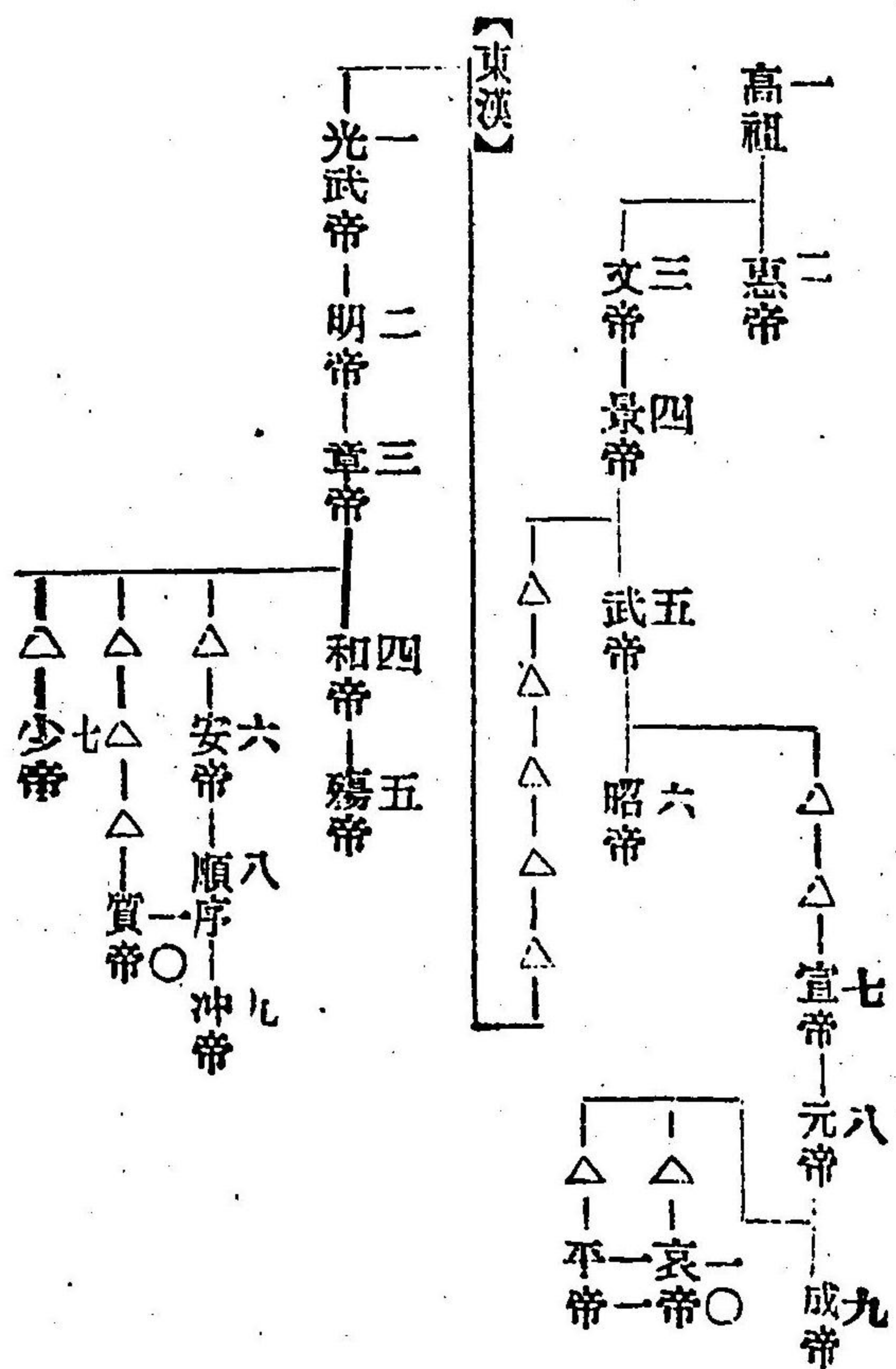
摘

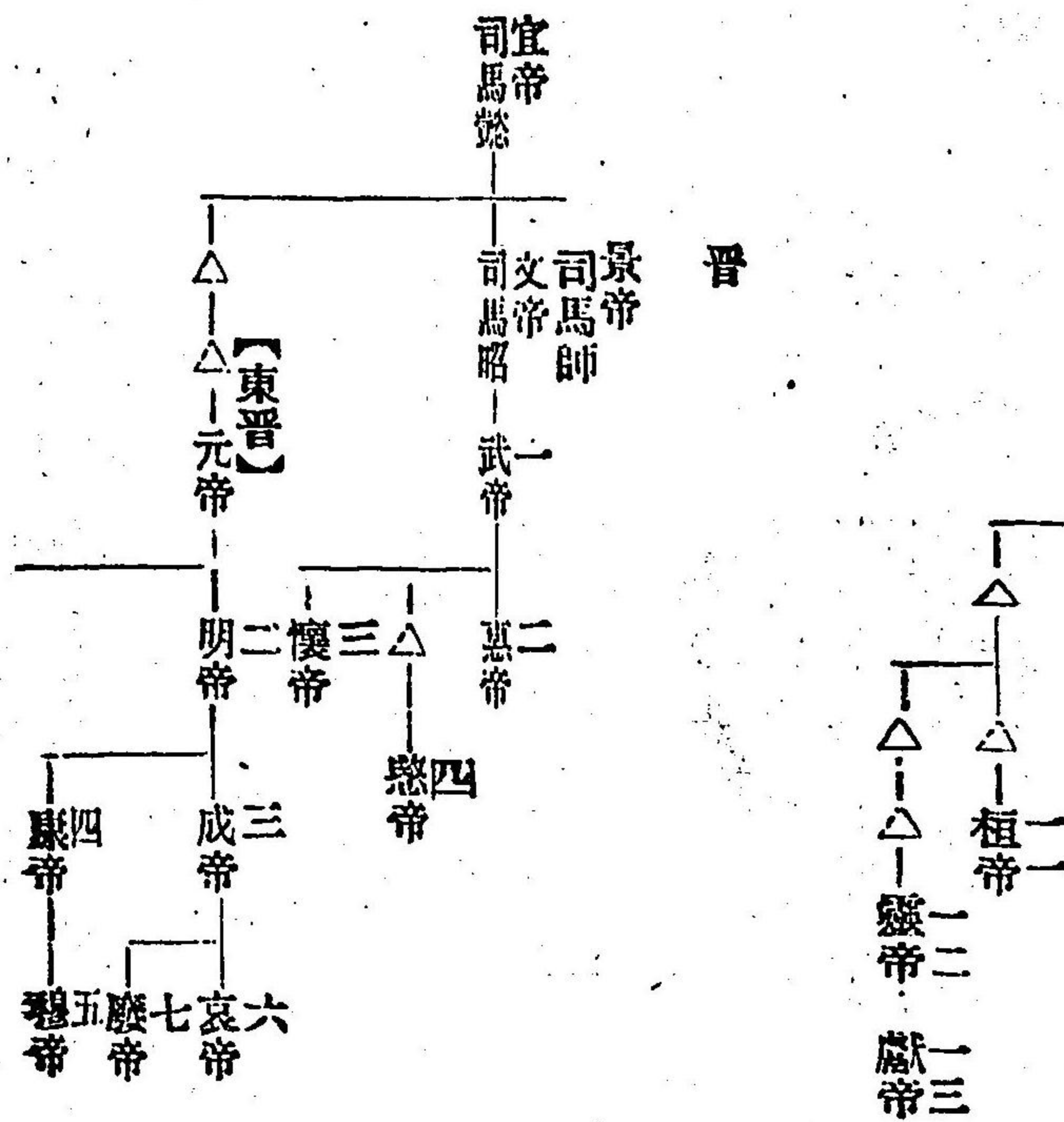
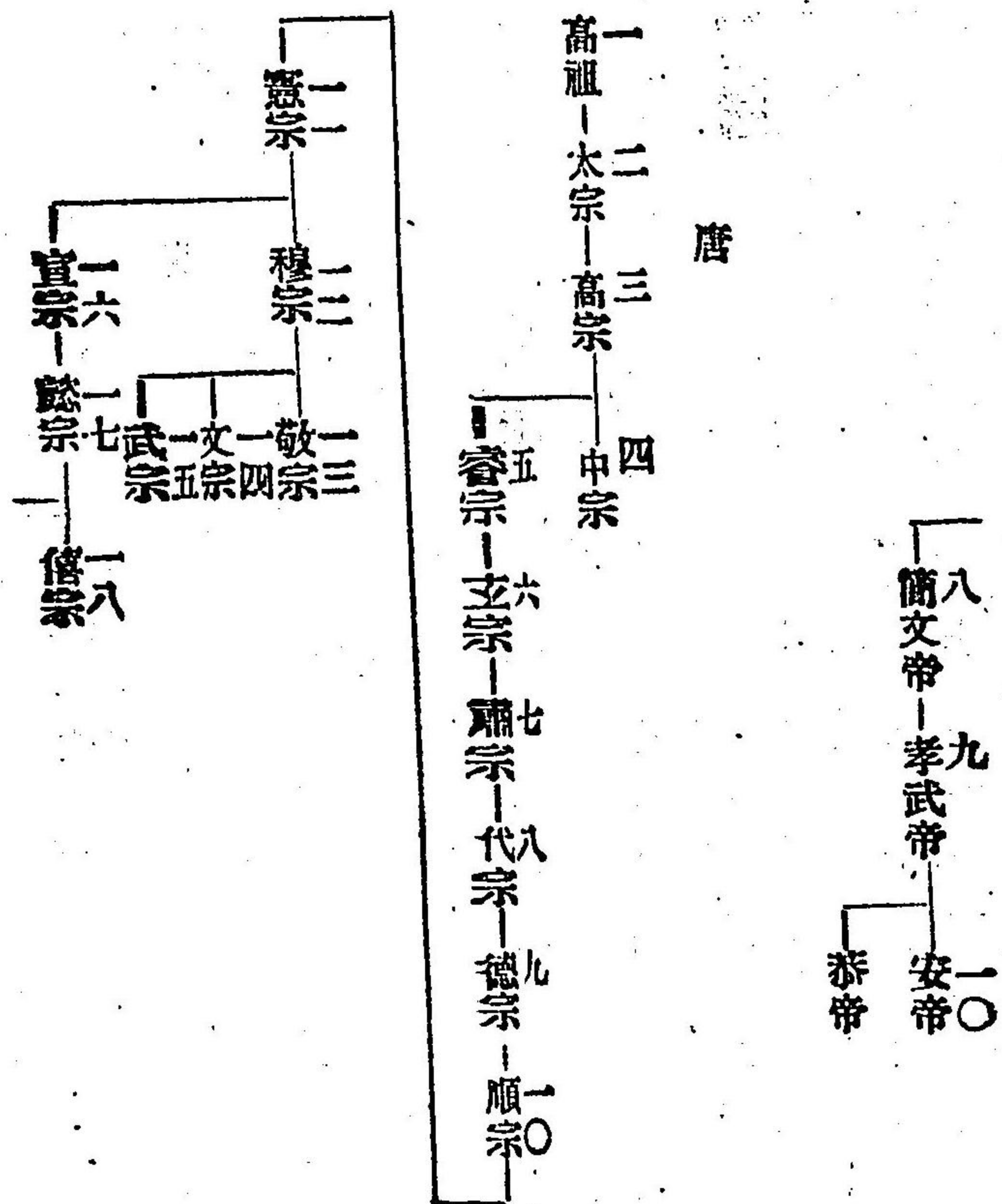
要

露の旅順、大連租借、佛の廣州灣租借、英の威海衛租借。
 清國改革黨の失敗、西太后朝に臨む。
 清國、義和團の亂起る。
 各國聯合軍北京に入る。
 李鴻章死す。
 日英同盟成る。
 露國滿洲を占領す。
 日露戦争起る。
 遼陽の大戦、沙河の會戦、旅順の陥落。
 奉天の大戦、日本海の海戦。
 樺太の南半日本領となる。
 日英攻守同盟成る。
 日韓協約の結果、朝鮮、日本の保護國となる。
 滿洲に關する日清協約成る。

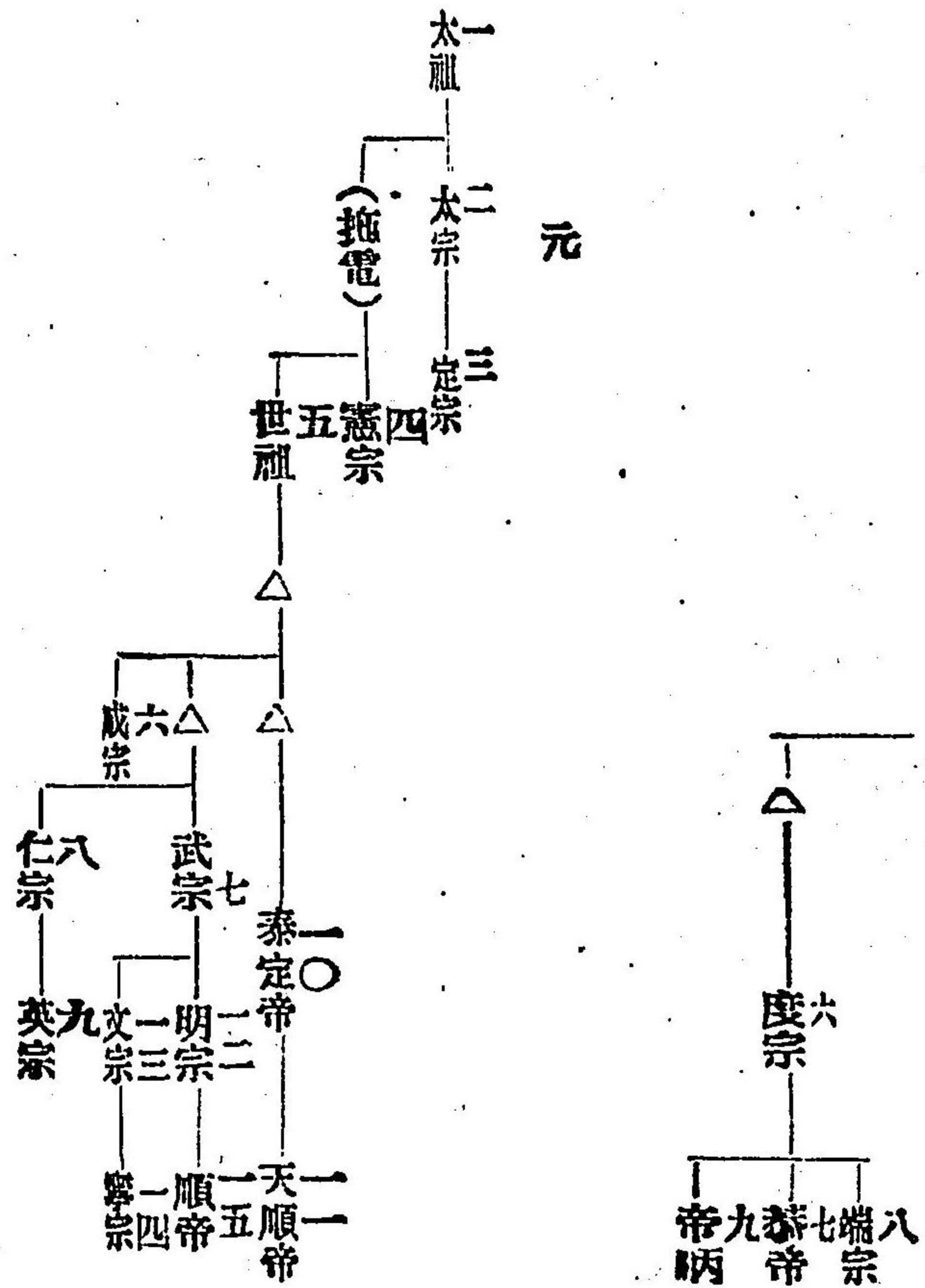
主要なる系圖

漢

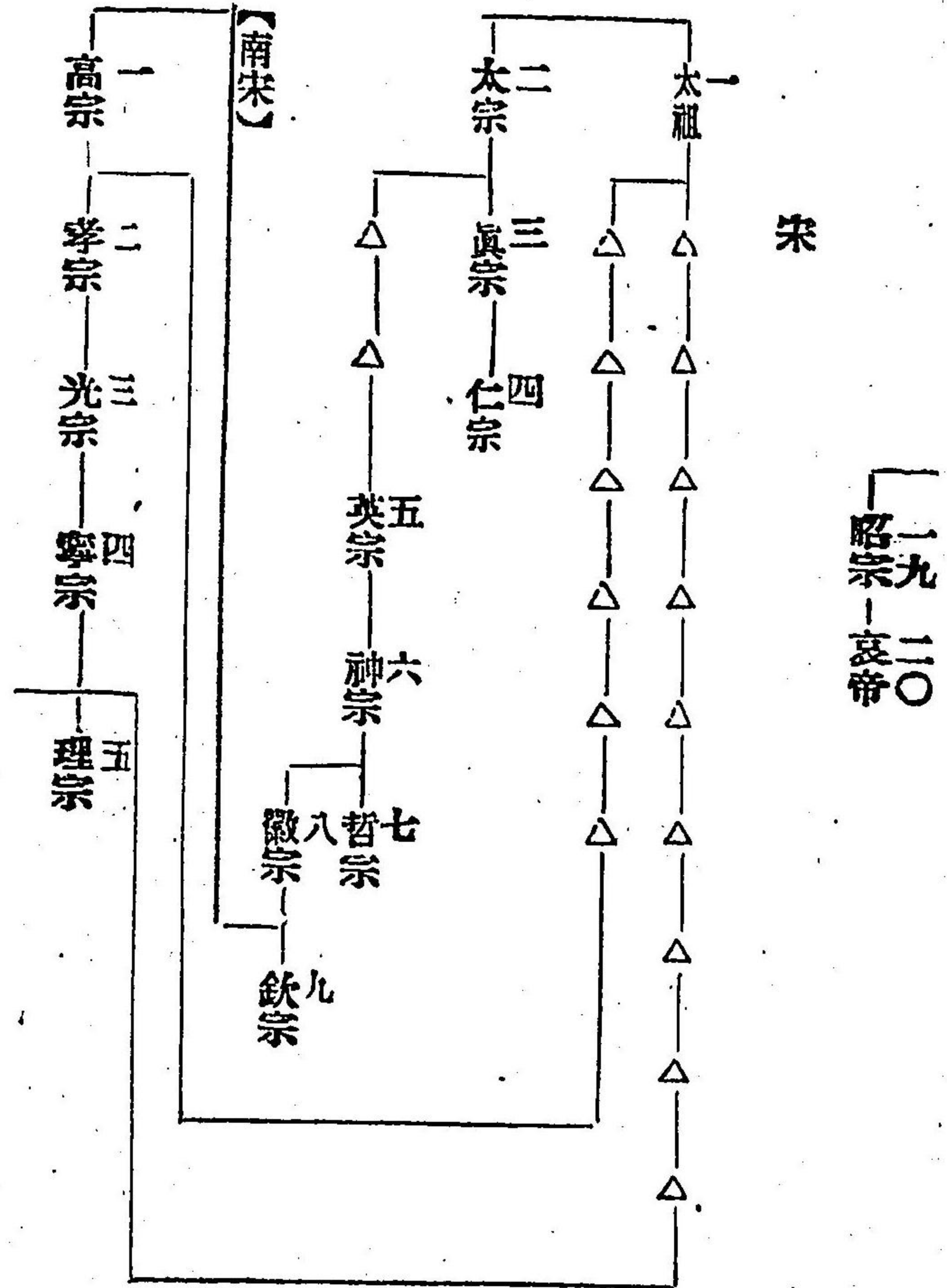




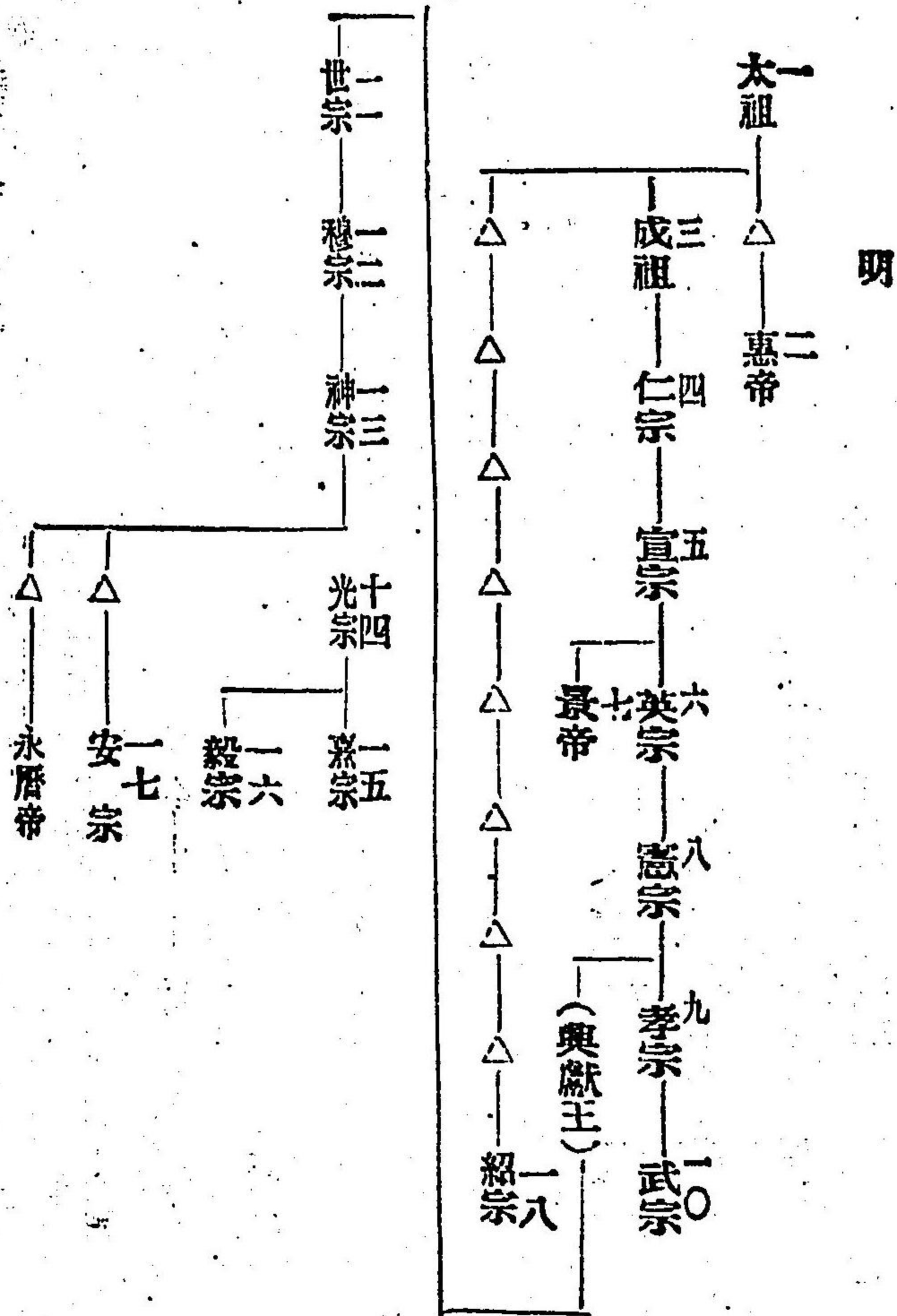
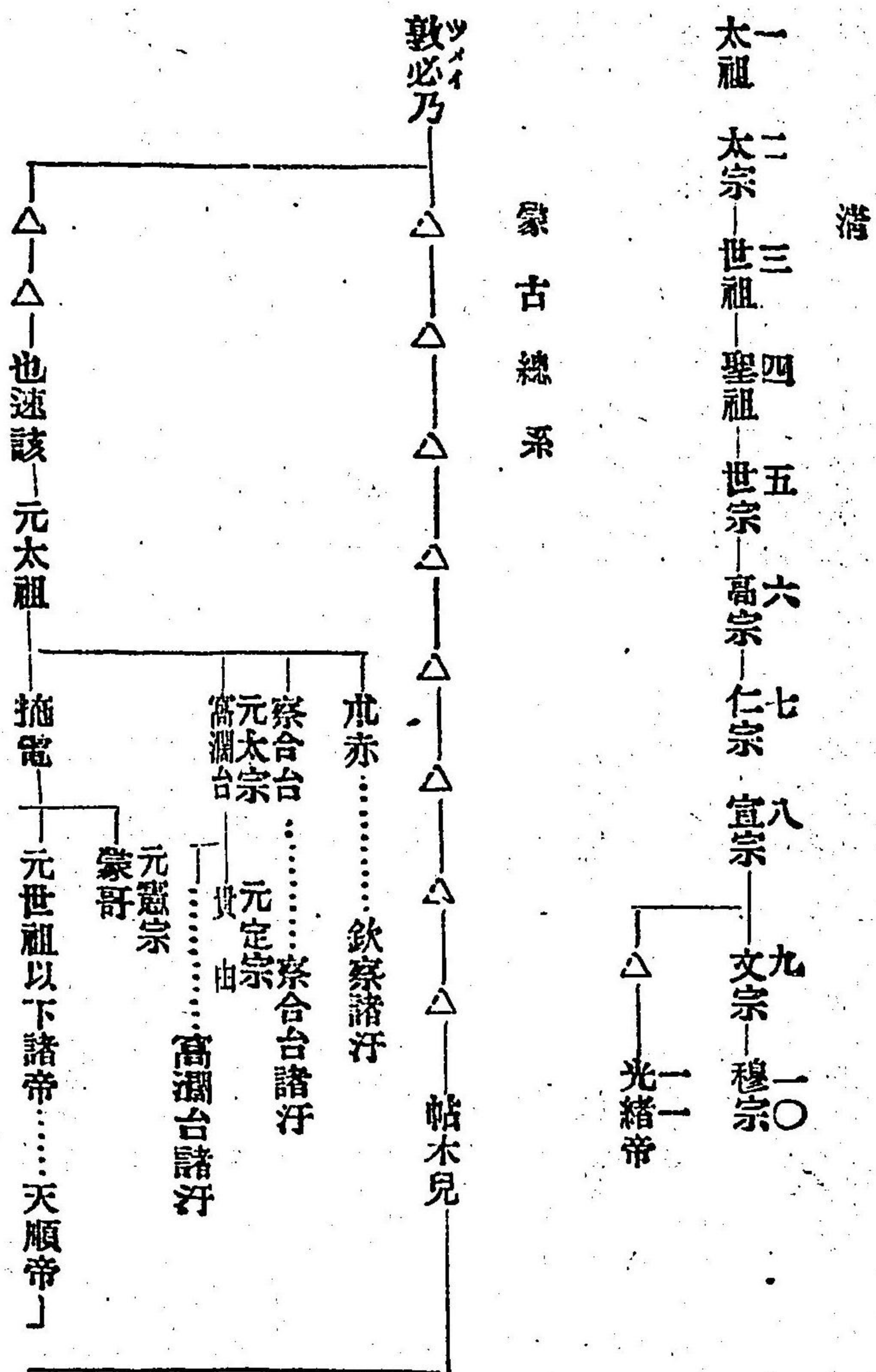
元



宋



昭宗 哀帝

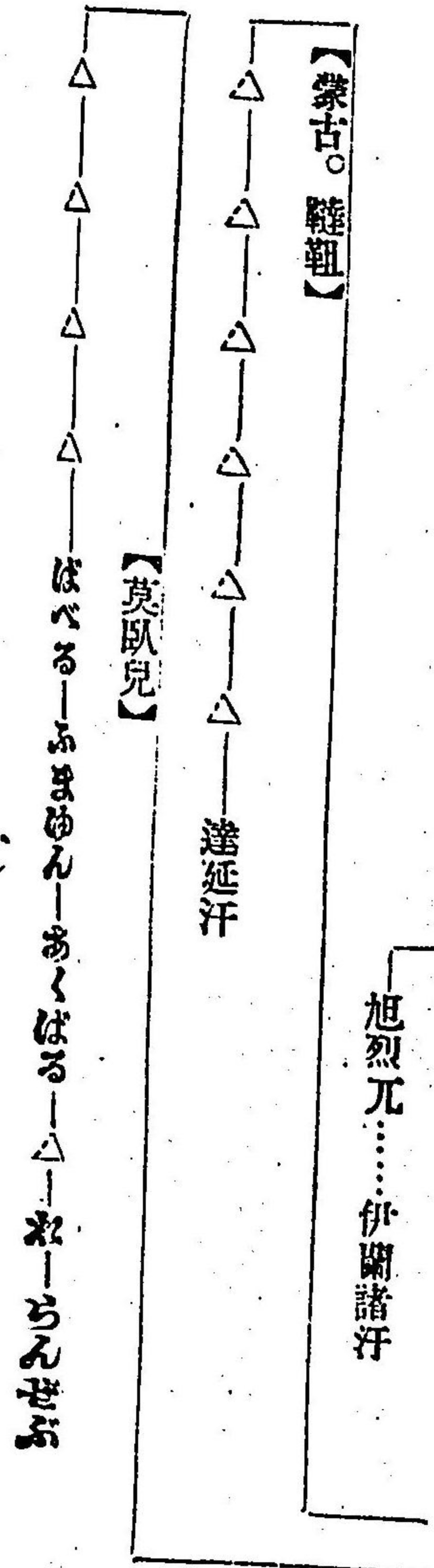


夏	殷	周	秦	漢	魏	蜀	吳	晉	宋	齊	梁	陳	後魏	西魏	東魏	北周
							漢									
一五四七	一一二四	四六二	四四〇	四五九	八八〇	八八一	八八九	九二五	一〇八〇	一一三九	一一六二	一二一七	一〇五八	一一九五	一一一〇	一二一七
一七	三〇	三七	三	二四	二五	二	四	五	八	七	四	五	二	四	一	五
四五八	六四四	八六七	一五	四二一	四六	四三	五二	一五六	六〇	二四	五六	三三	一四九	二五	一五	二五

歷朝	伏義	神農	黃帝	堯	舜
				帝	帝
即位の年 (日本紀元)	二二九三	二二七八	二〇三八	一七〇六	一六〇八

歷朝年代畧表

代數	年數
一一	九八 六一



東洋歷史表解附錄

を以り

清 明 元 金 遼 宋 後 後 後 後 唐 隋 (北 齊)

周 漢 晉 唐 梁

一一一〇
一二四九
一二七八
一五六七
一五八三
一五九六
一六〇七
一六一一
一六二〇
一五七六
一七七五
一八六六
二〇二八
二二七四

一九五九 九八三二 二二四二 〇四六

二七九 二〇七 三〇〇 一〇四 一四一 二九〇 三八八

明治四十年一月廿五日印刷
明治四十年一月三十日發行

著作者

久保田 操

發行者

大塚 宇三郎

發行者

田中 太右衛門

著作
所有

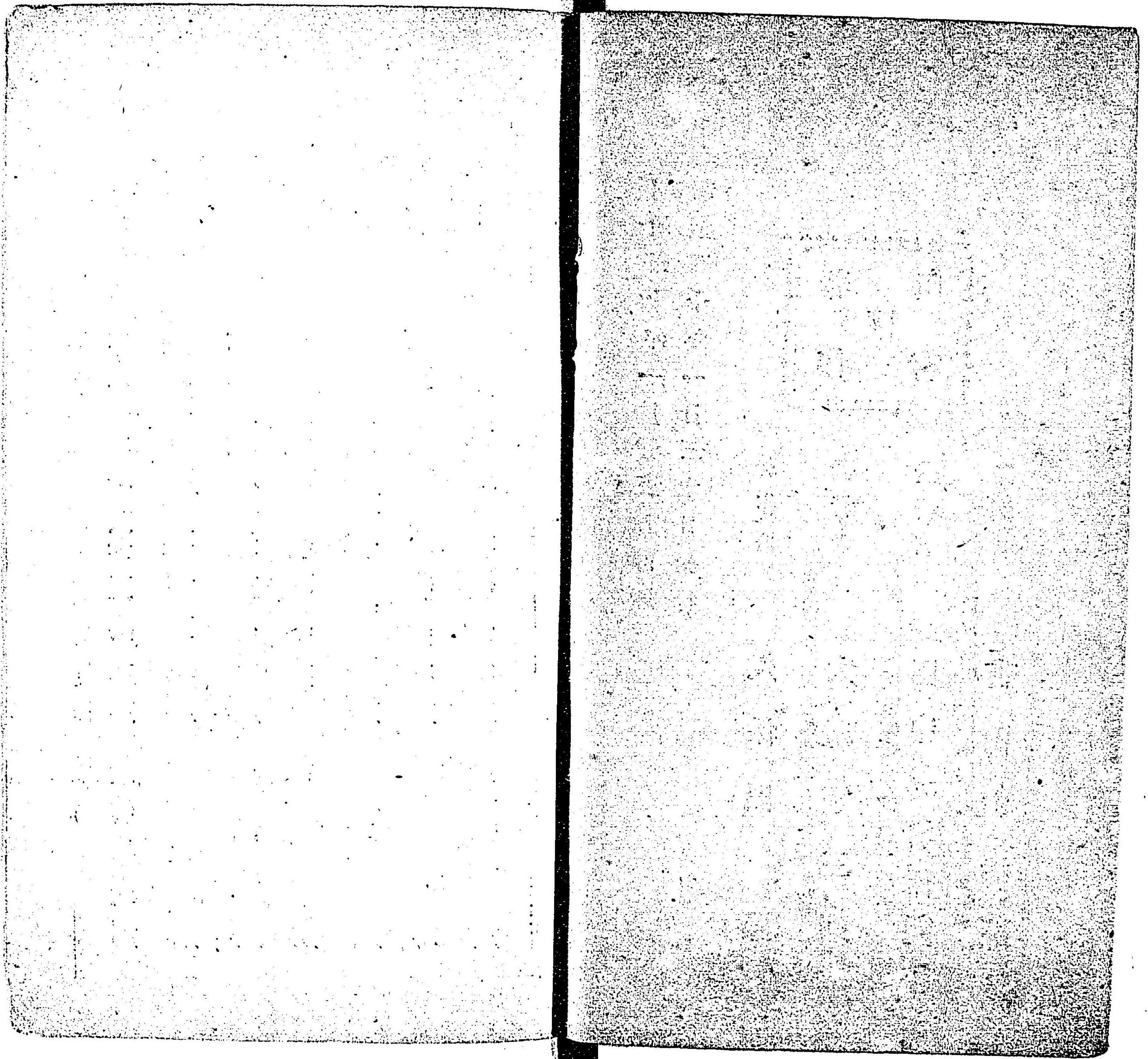
印刷者

吉田 由治郎

大阪市南區安堂寺橋通四丁目三三四番屋敷

大阪市南區安堂寺橋通四丁目二四二番屋敷

大阪市四區阿波座四番町一七四番屋敷



致一文言

書全解表學通普

錢二金稅郵●錢二拾金冊一價定

漢文典表解	日本文典表解	西洋歷史表解 <small>下</small>	東洋歷史表解	日本歷史表解	外國地理表解 <small>下</small>	日本地理表解
植物學表解	動物學表解	化學表解	物理學表解	地文學表解	英作文表解	英文典表解
全部貳拾貳冊	三角法表解	幾何學表解	代數學表解	算術表解	生理衛生表解	鑛物學表解